

田村（佐藤）俊子における『女声』―「信箱」「余声」を中心に（下）―

札幌大学総合研究 第八号（二〇一六年三月）

〈論文〉

田村（佐藤）俊子における『女声』―「信箱」「余声」を中心に（下）―

山崎 真紀子・周 珊珊（訳）

はじめに

本論は、本誌「総合研究」七号に掲載した田村（佐藤）俊子における『女声』―「信箱」「余声」を中心に（上）の続編である。引き続き、『女声』の巻末に読者からの手紙を回答する「信箱」と、編集後記にあたる「余声」に的を絞って内容を紹介していく形で進める。『女声』は、毎月十五日に刊行される月刊誌で、一九四二年五月に第一巻第一期として創刊された。前論では創刊号から一九四三年四月号までの一年間にわたって毎月刊行されていた十二冊すべてに言及した。本論ではその後を受けて、一九四三年五月号から一九四五年四月号までの二十四冊を対象とする。

日中戦争下において、日本の軍部が金銭や資材を提供していた中国語の雑誌『女声』は上海で発刊された。明治末から大正中期まで日本文壇の第一線を走っていた田村（佐藤）俊子が編集長を務め、関露など二、三名の若い中国人女性とともに俊子の死去まで三年間、死後追悼号が二巻、総計三十八冊残されている。俊子は創設されたばかりの日本女子大学国文学部に第一期生として入学したが、経済上の行きづまりから大学を中退して幸田露伴のもとで作家修業に入った。田村俊子は男性が中心を占める文壇で、封建的な制度下における男女間の相剋や、女性のセクシャリティに目を向けて表現を凝らした独特の作風を確立した作家である。

本誌前号の拙論で見てきたように、『女声』創刊号から十二号に至る編集部と読者との交流は、女性を取り巻く封建思想に端を発する婚姻問題、教育や職業、避妊や育児、男女間の恋愛や愛情問題を中心に意見が交わされてきた。これから見ていく「信箱」も、旧態依然とした親の圧政によって自由を奪われ、親の強い結婚に苦しむ読者からの相談や、経済上の困窮によって教育の機会が奪われながらも自力で学問を進めようとする意欲や欲求を受け止める場所としてのそれである。

本論で見ていく第二巻第一期～第三巻第十二期の二十四冊は、読者が「編集先生」と編集部に語りかけ、編集部は読者の固有名詞をあげて答える問答形式は変わらないが、これまで女性投稿者による「信箱」に男性も加わることになった。二十四冊分で日本語に翻訳して約十五万文字、そのすべてを紹介するには紙幅が足りないのです、四点のテーマに分けて代表的な手紙、その回答を構成していくとする。また本論も引き続き『女声』の翻訳ベースは周珊珊が担当し、山崎が執筆した。以下、「信箱」は信箱と、「余声」は余声と記す。

第一章 信箱に見られる恋愛、結婚の苦悩

本論の対象としている期の信箱の投稿者は、主に十五歳から二十五歳位の年齢層が中心であり、その関心は恋愛や結婚に関するものが圧倒的に多い。読者はまず「貴刊を読むと知識を得られ、悩みが消え、貴刊より大切なものはない」とする謝辞から始め、自分の悩みを書き記す。本章では主に読者から寄せられた恋愛と結婚の相談を取り上げていく。

まず、十七歳の少女・姚臻女史からの投稿である。金銭にとらわれた母が、性格が悪く品行不良で向学的ではない青年との結婚を強要、母に反抗しても「結婚は両親が決めることで、子女は介入してはいけない」との答えしか返ってこない。母を説得するにはどうしたらよいかとの相談である。回答は、あなたの母はあなたを愛していて、あなたを犠牲にしようと思っているわけではない。母に強い言葉を使わず、柔軟な言葉で、現在の女性は学問を積めば就職できるし、金銭も稼げる、母の世話もできると説得するように。それでも聞き入れてもらえなかったら、結婚式には出ずに、強い態度を堅持して勉強に精を出すようにと、母を慮りつつ自我を貫き通すように勧める回答をしている（第二巻第一期）。

次は、家庭は温かく職業も安定しているという二十二歳の螢茵女史の相談である。彼女は四年前に戦争のために兄に連れられて上海に移り住み、そこで同居者の妻子ある男性と恋に落ちてしまう。相手は二十九歳で、学識豊かで人柄も優れて、悪習慣もない前途有望な青年である。しかし、彼は既婚者で三人の子の父だ。彼も彼女のことを受け入れる意欲があるが、彼女は八人の生活の責任を負う彼に迷惑をかけてはいけないと思う。彼の家族も妻も彼女に優しく嫉妬しない。ただ、苦しい胸の内を吐露する内容である。これに対して文芸作品を用いて回答している。以下に要約して引用する。

螢茵女史：あなたはゲーテの「若きウエルテルの悩み」を読んだことがあるだろうか。青年ウエルテルが婚約者のいる身である女性シャルロッテに恋をする。シャルロッテが結婚することになって、ウエルテルは恋愛の苦痛に陥ることになる。三角関係は一角を犠牲しないと、三人とも幸せになれない。ウエルテルは自らを犠牲にする。ウエルテルの原型はゲーテだ。ゲーテは小説で自分の身代わりを作って、彼を死なせ、実はゲーテ自身が逃げ出している。少年ゲーテは情熱溢れながら、大きな理性の力も持つ人だ。自分の前途とシャルロッテが幸福になるため、彼は彼女のそばから離れる。自分が幸福になれるかどうかは、理性的にこの件を解決できるかどうかと関わっている。あなたの相手は妻も子供もいる男だ。あなたは自分のためにも、家庭がある人間と結合してはいけない。理性を用いて、感情の衝動を克服すべきだ。愛情は自然に生まれたことで、簡単に愛を止めるのは難しい。理性の力を使つてほしい。自分の人生を広げよう。そして、結婚しない恋愛は純潔で貴重なものかもしれない。どこかに旅をして、気分転換してはどうか（第二巻第二期）。

以上のように、ゲーテの小説を例にあげて、妻子ある男性との関係が成立しがないことを年若き女性に説得している。

次に見るのは、結婚すべき相手かどうか悩む二十二歳の文玉女史からの手紙である。誌面の通り問答形式で要約して記そう。

編集先生…私は二十二歳、幼年時代両親を失い、二人の兄に育てられた女性だ。十八歳の夏、私は兄嫁の弟と恋愛した。半年経たないうちに、彼がほかの女性に心を奪われたので別れた。これは感情が豊かな私にとって、非常につらいことだった。一年後、私は進学のため香港に行ったが戦争で上海に戻ることになった。偶然にも久しぶりに彼と再会し関係が戻った。まもなく、二人はそれぞれの都合で南京に赴くことになり、同じ家に住むことになった。話す機会が増え、私たちは再び恋に落ちた。彼は昔より親切になった。彼は「事業が成功する日が、私たちが婚約を結ぶ日だ」と私に言った。私は以下の問題を先生に聞きたい。（一）、二人の兄は私の未来の夫に対して大

学卒業で、富裕であることを条件にしている。だが、彼は大卒ではなく、家庭状況は私の家と同レベルだ。もし、兄が反対するなら、私はどうすべきか。(二)、彼の事業が成功する以前に、彼がまた浮気したら、私はどう処理すべきか。(三)、いま、私は彼と親密にすべきか、或いは距離を持つべきか。距離を持つなら、彼が変心する恐れもある(私たちの交際は家族に隠している。そうしないと、すぐ阻止される)。(四)、私は彼と結婚して幸福になれるか。

文王女史…これは私たちが君の代わりに解決することができない問題だ。恋愛問題は解決したい問題だからだ。一番厄介なのは、彼は感情が移り、あなたを裏切ることがある人だということだ。すでに裏切ったことがある人を簡単に信じてはいけない。(一)、経済と教育レベルは恋愛と婚姻の条件ではない。重要なのは、向上心があり、堅い意識を持ち、独立できる人かどうかである。(二)、もしあなたが理性的な態度を保てるなら、彼が浮気しても、簡単に処理できるはずだ。もし、彼のことを疑うなら、彼のあなたへの愛を強くする。彼が再び浮気するなら諦めるしかない。(三)、もしあなたが彼と距離を持つことで彼が変心する心配があるなら、非常に危ないことだと思う。つまり、あなたと彼の愛情には認識と理解の基礎がないということだ。まず冷静になって距離を置いて、彼を観察したほうがいい。あなたの冷たさを感じて、彼は自分を変えるかどうかを確認する。(四)、もし以上の問題も円満に解決できないなら、あなたにとってこの結婚は危ない。一時の衝動は危険だ(第二巻第二期)。

以上のように、恋愛につきものの、相手の心変わりに対する不安を吐露する相談にも懇切丁寧に答えている。それは読者が若年層であり、恋愛に関してもまだ慣れていないことから、「編集先生」は初歩的な恋愛に苦しむ読者に真剣に向き合うことで、若者の読者に与えたいと思っている姿勢が感じられる。

なお、第一巻第一期の余声で、できるだけ内容を短く書くよう努めてほしいとの言葉を受けてのことか、第二期からは相談内容の結びの文は箇条書きにして要点をまとめるスタイルが見られるようになった。

さて、恋愛や結婚問題は若い女性にとって未知な分野であり、それゆえ模索し悩みも多くなるが、次に紹介するのは「独身主義」に関する相談である。要約しつつ問答形式で以下に記す。

編集先生…私は姉妹兄弟がなく、祖母と両親から大切にされ、快適な家庭で暮らしている二十歳になる女性だ。静かな性格だが、意外

に大胆で自信家でもある。私の家庭は非常に開明的で、両親は私の友人にも親切にしているので、私の社交は活発である。高校を卒業した私はある機関で働き、自活できる金銭を得ている。家庭も円満、職業にも恵まれ、友人も多い。最近、両親が私の結婚問題を心配し始めたが、私は以前から「独身主義」を抱いている。物質上の心配もなく、自立もできるし、暖かい家庭で暮らしている私は、あえて冒險する必要がない。私は一人で生活していく信念を持っている。私は世俗に縛られたくない。間違った伴侶と暮らせば、いろいろな問題が生じる。家事の面倒、姑との関係、生育、子どもなどの世俗の責任を負いたくない。「結婚は愛情のお墓だ」。国に新しい国民を産みだせない点を除くと、ほかに国、社会、道徳に違反することがあるだろうか。簡単に言えば、「独身主義」は許されるか。次号で回答をお願いする。これは私一人の問題ではないだろう。「独身主義」に関する文章、評論を掲載してほしい。

王系女史…あなたは利口な人間だ。頭が良すぎて、考えすぎている。若い女性、少女とも言えるあなたは、打撃や苦痛の経験がないし愛情の屈折もないのに、どうして「独身主義者」になりたいのだろうか。私たちから見れば「独身主義」は少しも意味がないことだ。「独身主義」は利己主義だ。自分の自由のため、個人の快楽のため、人情も生理の原則からも合わない。今は不景気な時代だ。この時代での恋愛は難しい。女性は生理と社会条件のせい、いつも婚姻で犠牲と打撃を受ける。しかし、私たちは積極的に解決方法を探すべきだ。男女同居は人間の、生物界の自然にもとることである。男女は交配しないと人間滅亡になる。私たちは社会制度の改革から、健全な恋愛と婚姻を作るべきだ。あなたの主張は間違っている。しかし、誤解しないでほしい。私たちは結婚を女性の帰着とも思わない。「恋愛」と「結婚」も人間生活にとって避けられない生活形式だが、生活のすべてでもない。女性は自分を男の妻と位置づけず、社会の主人として自己定義してほしい。私たちは弊刊で「独身主義」に関する文章を載せたくない。これは注目すべき記事とは思わないからだ。もっと積極的な思想を持つてほしい（第二期第三号）。

この投稿者の環境は非常に恵まれ、まるで絵に描いたようだが、その信憑性はともかく、要点は「独身主義」の可否に絞られるだろう。回答者は若い女性の頭の中でのみ考えた結婚観に批判を加え、利己主義だと叱正する。信箱全記事に目を通すと封建的な「家」から自由になること、学問や社会経験を積んで叡智を身につけて、運命を自分で切り拓くことを勧めている「編集先生」の姿が浮き彫りにされるが、「独身主義」に関する記事や評論の掲載の必要を認めないとするのはなぜだろうか。近代文学の大きなテーマは「家からの解放」「自己の

確立」であつたはずだが、その家を構成する家族制度、その傘下にある夫婦関係にもとづく対幻想は、仇敵にはならなかったのだろうか。

この「独身主義」については、他にも第二卷第十一期でも同様の手紙が載っている。回答のみ、その一部を見てみよう。

家玉女史…私たちはあなたの問題に興味を持っている。一、「女はどうして嫁になるか」について、これは女の問題ではない。本質は人間はどうして結婚するかという問題だ。人間にとって、繁殖が必要だ。繁殖のため、両性関係が不可欠で、つまり結婚という形式だ。人間の機能及び自然法則によると、人間は結婚すべきだ。女が嫁になるのもこのルールに従う結果だ。もし、結婚しないと、ルール違反になってしまう。もちろん、独身の女もいる。彼女たちは特殊な信仰を持っているからだ。しかし、これは特殊な行爲で、不自然な行動だ。二、嫁に行かないと人々に非難される。これはもちろん正しくない。非難の理由は封建觀念だと思う。彼たちは女にとって、結婚は唯一の選択肢だと信じている。私たちは、男女同居が人情であり、この形を好きではないのも個人の自由だと思う。ほかの人に迷惑をかける、非難を受ける理由がない(第二卷第十一期)。

右の独身主義の是非を問う文は、女性読者からのものであつた。次に男性読者からのものを見てみよう。

編集先生…馬鹿馬鹿しい問題と思われるかもしれないが、先生の回答をもらいたい。(一)、貴刊第二卷第十一期で「女はどうして結婚するか」という問題がある。私が聞きたいのは、男はどうして結婚するのか。結婚しなくてもいいのか。しなかったら、どんな欠点があるか。(二)、もし異性の友達を作れば、必ず人からかわれる。まるで自分が何かの罪を犯したように。これはどういうわけであろうか。(三)、異性の友達といえ、恋人同士という感じがある。必ず結婚しなければならなくなる。交際期間が長くなると、相手は私でなければならぬという意味を含む言葉が出てきて、私と結婚を望むようになる。そして、私の個人生活に口を出すようになる。私は仕方がなく、相手と絶交するしかなくなる。精神上の友達を作るのはそんなに難しいのだろうか。(四)、どこかで「男女の間には友情は成立しない」ということを読んだことがある。これをどういう風に解釈すべきか。(五)、私は結婚したくないが、何人かの異性の友達がほしい。同性の友達のように、いくら気が合っても異性の友だちが愛情関係に移行することはない。どうすべきか。

永哲先生…あなたの問題の答えは以下の道理だ。(一) 人類が繁栄するため、男女は結婚すべきだ。男が嫁をもらわなく、女も嫁に行かないなら、人類が消えてしまう。そのため、独身主義は不合理だ。(二)、異性の友達があると、からかわれるのは今の中国で男女が自

由に交際できないからである。まだ封建思想に縛られている。そのため、男女の付き合いは必ず注目されてしまう。（三）、君の女性の友達は結婚したいといったのは、あなたが彼女に親切すぎるからかもしれない、彼女があなたの意図を誤解してしまう。あるいは、彼女のほうが情熱的過ぎる。私はすべての女性がそういう風に君を扱うわけではないと思う。男女は精神上の友達になるのはもちろん許されることだ。しかし、これは必ずある精神生活を土台としてなければならぬ。たとえば、興味が同じ、思想が同じ、信仰が同じなど。そうしないと、男女の間には、肉体関係しか残っていない。旧社会での男女の間に共有するのは肉体関係だけだ。原因もこの点にある。（四）、「男女の間に友情は成立しない」のは旧社会の考え方だ。旧社会で女の知識が浅くて、男と比べられない。男女の間に精神上の共鳴が作れないからだ。（五）、異性の友達を作りたいのはもちろんよいことだ。しかし、友情以上の感情が生まれるのも自然なことだ。人間は感情を持つ動物だ。結婚については、これはあなたの個人問題だ。あなたが結婚したくないなら、誰もあなたを結婚させられない。しかし、私たちはもし将来君がよい女性と出会ったら、あなたも結婚したくなると思う（第三号第三期）。

以上のように、独身主義をめぐる「編集先生」の考え方は、結婚しなければ人類が途絶えてしまうとの意見は三者共に共通して述べているが、女性読者の場合は頭で考え過ぎている点を指摘し、結婚は人情や生理上から自然なことであるという言説で、独身主義に反対している。男性読者に関しては男女間の友情は成立するが、相手の感情次第では友情以上の感情が相手に生じることを「自然」な感情と述べている。

確かに一度結婚してしまうと、その解消は容易にはいかない。次に見るのは具体的な離婚相談、およびその後についての相談である。編集先生…あなたは確かに女性の灯台だ。私は小学教員、家庭教師など社会で働いたことがある二十歳余りの家庭の主婦だ。結婚後、私は家庭に縛られているが、女性と児童の仕事に身を捧げる信念は中断していない。いま、私は五歳の子どもがいる。夫とは信念がずれてしまった。彼が求めるのは地位、金銭、物質と女だ。外に女性もできた。私は物質生活上は困らないが、精神上の苦しみが大きい。しかし、子どものために離婚はしない。子どもに適切な物質生活を提供できないからである。私は女性青年会の託児所で働きたい。子どもと一緒に連れて行きたい。今の問題は、一、私の考えで家庭問題を処理するのは適切か。二、私は彼と離れても、彼に子どもの責任をかわせられるか。離婚は、子どもの前途を妨害するか。三、私を託児所に紹介してくれるか。

不幸女史…あなたの境遇に同情を寄せる。と同時に、あなたの向上心と勇氣に感心する。あなたと夫との思想がずれてしまうと、生活も幸福ではなくなるだろう。ところが、今の社会は理想社会ではない。女性はいかなるところでも、いかなる事件にも損を負わせられる。基本的には私たちはあなたと夫が別れることに同意する。離婚しても構わないが、一番大きな問題は子どもだ。あなたが子どもを養育するとなると、最も大きな問題は経済問題だ。今の苦難の時代は、あなたのような圧迫された女性だけではなく、多くの男性も就職できない。だから、仕事を見つけるまでは、夫のことを我慢してほしい。就職が決まったら、計画通り、彼のそばから離れる。そして、離婚しないで彼に引き続き子どもを養わせる。今の時代は「強権」はあるが、「公理」がない。もし、あなたの夫が子どもの世話をしなかったら——彼も外に女がいるし、問題がもっと複雑になる——私たちが見ている多くの父親と同じく自分のことしか考えないなら、あなたはどうするつもりなのか。だから、私たちの意見は、まず「外の道を探す」ことを勧める。見つかる前に、簡単に彼のそばから離れない。もし、決めるなら、子供をつれて一緒に出る。託児所の件について私たちは聞いてみたが、もう満員だそうだ。働くのはもっと無理だ。縁故がないと入れないからだ(第二卷第三期)。

以上のように、子どもを持つ女性の現代にも通じる離婚の相談であった。仕事の斡旋の依頼にも応えている。

次に紹介するのは、身体に障害をもち、恋愛関係において不当な扱いを受けている女性からの手紙である。

編集先生…私は幼稚園の頃に病気で聴覚を失い、言葉が通じない。両親の愛も薄れ慰めてくれる人がいない。十二歳のとき、私は聾学校に通うようになる。そこで同障害を持った彼と知り合った。知識がなかった私は単純に彼の親切さに心惹かれ、彼の言うまま転校した。ある日授業が終わった後、私は貞操を失った。純潔な私には消えない傷が残った。それから、彼はよく私を誘惑し、私は妊娠した。私は彼の言う通りに堕胎し、だんだん体が衰弱するようになった。彼も昔のように私に親切してくれない。逆に、時々私を脅迫する。やがて、彼が結婚したことがわかった。彼の優しさはすべて私を誘惑する手段に過ぎなかったと、今後悔してもすでに手後れだ。両親は名譽のため、このことを隠した。学校に行くことを禁止され行動も制限され、ほぼ毎日にいる。時々自殺しようと思うが、兄の雑誌を読んで、自殺は弱い人の行動で、何も解決できないということを知る。私のような人間に、未来があるか。引き続き生きる価値があるか。苦しんで、悩んで、怖くて、恥ずかしく思う。先生のご指導をもらいたい。

不幸な少女…あなたの手紙を読んでいるとき、私たちは泣いた。病気で聞こえなくなり、その辛さは言うまでもない。あなたが出会った男に、私たちは非常に立腹している。言葉で人を騙して、目的が達成すると、すぐあなたを捨てる。あなたは裁判所で彼を訴えることができる。刑法によると、妻がいる男はほかの女を強姦すると、七年以下の有期懲役を与える。あなたはなぜ自殺したがるのか。自殺の勇気を持って、あなたの敵と戦おう。名前を忘れたが、ある女英雄がいる。彼女の五官が機能するのは鼻だけだ。目も見えず耳も聞こえず声も出せない。しかし、彼女の手は美しいピアノ曲を弾けるし、速く入力もできる。鼻の嗅覚と舌の触覚、彼女は普通の人より大きな業績を上げた。障害者が成功する事例は多い。あなたも勇気を出して環境と戦おう。努力しないと、成功できない（第二巻第五期）。

引き続き第二巻第七期においては既婚者との恋愛についての相談が二者あるが相談記事は省き、回答だけ簡単に記す。

琴英、岐舜女史…これは有触れた恋愛問題だ―封建社会で親に強いられた婚姻に不満があり、ほかの人と愛し合う。特に男の場合だ。まず人間の結婚はただ「性」の結合なのかという問題から始める。もしそうなら、人間はほかの動物と同じになってしまう。あなた方が旧式婚姻に不満を感じるのも自然なことだ。「これは親が嫁をもらうのだ。子が嫁をもらうではない」のような発言をするが、彼らは彼らの妻にも無情ではないか。円満な婚姻は適応性が大事だ。他人を厳しく要求するだけではなく、相手に親切にしてあげるべきだ。親の思想の陳腐はもちろん重要な原因だが、自分も責任を負うべきだ。彼らは親に強いられる婚姻に不満を抱くのは合理的なことだが、結婚する前に反抗すべきだ。すでに夫婦になったなら、家庭の責任も負わなければならない。しかし、彼らはそうしていない。すべての責任を親に負わせる。もし二人の間に残るのが恨みしかないなら、早く離婚したほうがよい。そして最後に、若い女たちに注意したい。男子と恋愛するとき、彼が結婚するかどうかをまず調べたほうがよい。既婚者と恋愛すると、悲劇になりがちだ（第二巻第七期）。

次に貞操の問題についての相談を見ていくとする。

編集先生…私は田舎の貴族家庭に生まれて、父は清代の挙人だ。女にしても知識が必要だということを彼は知っている。私は私塾で何年間も勉強して、都市の中学校に進学した。中学校を卒業する年、戦争が始まった。私は両親と兄と一緒に上海へ避難しに来た。しかし、戦争のせいで、一週間歩き続けての移動だった。三日目に強盗集団と遭遇した。彼らは両親を殺し、兄も仕方がなくて彼らの集団に入った。その時、私は十七歳の少女だった。私は兄と一緒に彼らの集団に連れ去られた。その後、私は二度と兄の姿を見たことがない。ある

隊長は私を気に入って、彼の第二婦人に強要した。私は反抗したが、彼の暴力で屈服してしまった。私は貞操を失い、地獄に落ちるような日々を送っていた。ある日、営区には誰もいないとき、歩いて上海の叔母さんの家に逃げた。叔母さんはまるで自分の娘のように私の世話をしている。彼女の息子は銀行で働いている。私と彼の関係もよい。そして、ある日彼にプロポーズされ、その後は私のことをさらに親切にしてくれている。彼は私が未婚の少女で、知識も持っていると思うからだ。私は毎回結婚のことを誤魔化している。私は今年で二十歳になり、青春期のただなかにいて愛情を求めている時期だ。私は彼に応じようとするが応じられない。私も処女ではないからだ。私は彼と結婚できるだろうか。もし彼に私がすでに貞操を失ったと知ったら、私はどういう風に扱われるのだろうか。罵られ、辱められるに違いない。もし、彼に応じないと、叔母さんと彼の好意にも気がすまない。以上の二つの点で、私は最近ずっと悩み、そして困っている。先生の助けを待っている。

小雲女史：あなたの問題は複雑そうに見えるが、実は簡単に解決できる。もし、その男性が本心であなたのことを愛して、人格を信じて、あなたの長所を大切にし、彼も大人しく、理解力や理性がある人間なら彼に教えてあげよう。女子が貞操を失うのは欠点ではない。自分の感情が純潔で、高尚な魂を持つならそれでよいのだ。そして、あなたの事情は特殊の場合であり、許されることだ。次に具体的な意見を述べる。第一、自分の観念を更新する。貞操を失うのは彼にすまないことではなく、彼と出会う前に起こったことで、たとえ出会った後も、彼にすまないわけでもない。第二、直接に事情を彼に打ち明け、どんなことも隠してはいけない。もし、彼は誠意をもってあなたと付き合うなら、このことを知っていて、よりあなたを愛するべきだ。あなたの遭遇と生活で貴方の非凡さを感じるだろう。そして、もし彼が進歩的で正義感を持つ青年なら、あなたがお金と勢力に屈服する女性ではないことを感じ取るべきだ。

あなたは体には傷はついたが、魂は完璧なものだ。あなたの彼への愛情は純潔なものだ。あなたたちの愛情も深化されるべきだ。三、もし、直接に言って、事情を処理できない境地に陥り、彼に与える刺激が強すぎると心配するなら、まずはすべてを白状しない。あなたの身の上に起きたことをほかの人の遭遇だと言って、自分がその女性に同情するという態度で話をしてみて、彼の反応を観察する。そして、彼にあなたの誠意を見せ、あなたの話を信じさせる。もし、彼もあなたの主張に同意するなら、あなたはすべてを打ちあける。言い方については自分で工夫してほしい。物語を人の心を動かすように語るのも難しいことだ。しかし、叔母さんには内緒にしたほうがいい。

多くの年寄りは頑固で封建思想を持っているからだ（第二卷十二期）。

このように戦争によって被害に遭った貞操問題について応えている。次に男性の心変わりに傷ついた女性の相談を見ていこう。

編集先生：私は南京の中学校を卒業したあと、恋という誤った道に入ってしまった。そして、虚栄心のせいで、ある実業家と結婚した。私は彼が誠意を持って自分のことを愛しているのを知っている。私たちの間に起こる問題は、周りの悪い環境の仕業である。二人とも大家族出身で、双方の家族も私たちの結合に不満がある。私と彼は駆け落ちをして結婚したからだ。家族は名誉を守るため、私たちを戻させることにした。夫は感情深い、強い男だ。家族に軽蔑された上に、私と彼に経済的な独立という要求を出したので、彼はひそかに家を離れ、事業を求め始めた。彼がそのようにして出たことを、私は非常に後悔している。その後、彼が従軍したことを知り、北方の軍事学校で勉強し始めた。最近、ある頼もしい友人が、彼が北京にいるお嬢さんのことを愛するようになったと、私に聞かせた。彼の私に対する態度も徐々に冷たくなった。私は彼に捨てられる可能性が高い。世の中で、一番私のことを愛してくれた人も私のことを愛さなくなる。悲しくてたまらない。私はただ国を恨んでいる。どうして大家族が存在するのか。私は大家族という制度に抑圧された人間だ。私は籠の中の鳥のような存在だ。そして、この様な私は毒蛇に狙われる。毒蛇は私が苛められる様子を楽しんでいる。先生、私もこれ以上このような真つ暗な世界で生きられない。自殺の道具も準備して、この世を去る前に、少し先生の声を聞きたい。

錦環女史：あなたの遭遇は不幸だ。あなたの夫は非情な男だ。この様な男と出会って、あなたが悲しみと苦痛を感じるのも免れないことだ。しかし、あなたの夫のような人間は社会には山ほどいる。そのため、あなたと同じように苦しんでいる女性も多い。今の社会はまだ男性優位の社会だからだ。男は女より数倍以上の自由を持っているし、社交に参加し、女性と接触する機会も多い。浮気する機会も多くなる。そういう状況で苦痛を負い、犠牲となるのはほぼ女性だ。しかし、私たちはこの苦痛と犠牲を負わざるを得ないわけではない。弱い人間が感じる苦しみは濃くて、犠牲も大きい。強い人間は苦痛を超えて、経験した苦痛と犠牲はかえって人生の大切な経験に変える。今あなたの考えが入り乱れていて、心が苦しみに包まれている。私たちは言葉であなたが癒されないことを知っている。私たちはあなたに対して持っている希望は、まず自殺しないことだ。自殺は一番弱い人間の遣り方であり、完全に誤った考え方である。世の中に私たちより数倍以上の苦しみを嘗めている人間がたくさんいる。彼らが生きられるなら、どうして私たちはできないか。今から苦痛を敵とみなし、

戦わなければならない、降伏してはいけない。そして、精神上の頼りを探そう。もし、精神上の頼りになれる場所が見つかったら、苦痛も忘れられるだろう。私たちはあなたがいまからすぐ家から出て、学校に通って勉強するのを薦める。自分が興味を持っていること、経済上の独立にも役に立つことを学ぼう。経済面で他人に依存するため、あなたは騙されるわけだ。これから二度と同じ過ちを犯さないように、金のために誰かと結婚しないでほしい。経済的に独立できるという基礎があるなら、将来も他人に無視されない（第三卷第二期）。以上のように、相談は失恋したことの心痛を訴えているが、その元には個人の意思を尊重しない封建的な大家族主義への憎しみがあるようだ。それに抗するために回答者は、女性の経済的自立を訴えている。そうすれば人から見下されたり、誰かの命令を聞き入れたりしないで済む。自殺まで考えるほどの悲しみを、自立に向かって学ぶことを勧めている。経済的自立をはかるために学ぶことを、信箱は常に発信している。では、自らの上に被ってくる倫理についてはどうだろうか。次に見ていくのは、既婚女性が男性と付き合ってもよいかどうかの相談である。

編集者先生…私の夫は小学校の教師である。人柄がよくて、学問もある。しかし、彼はいつも寡黙で、世の中のいろいろな現象に不満を抱いている。私と彼は七年間の結婚生活を送っている。この間、私は友達で紹介でA君と知り合いになる。彼は芸術の研究をしている人だ。私も芸術に興味を持っている。私と彼の交際は始めたばかりで、手紙の遣り取りをしている。ある日、夫はA君からの手紙を見つけた。彼はすごく怒った。手紙の最後で一緒に映画を見ろという誘いが付加されていたからだ。それから夫は私への態度が一変した。私はよく彼に説教される。私も教育従事者で性格が活発だ。暇があったら、一人で出かける習慣がある。この点も彼の悩みになる。先生、私はどうするべきだろうか。結婚後の女は異性との交際をしてはいけないのだろうか。

芝英女士：私たちの意見は、すぐA君をあなたの夫に紹介すべきだと考える。原則によると（進歩的な国）、あなたの友達は性別を問わず、あなたの夫とは関係ない。あなたの友達は、男にしても女にしてもあなたと関係ない。しかし、今の状況を見ると、中国の女の生活は苦しい。思想が自由で、行動力が強い女はよく誤解され、人々の議論の的になる。あなたたちはただの友達で、人に噂されても構わない。しかし、この方法はよいものではない。A君はあなたとあなたの夫の共通の友達になるのがよい方法だ。あなたの夫の寡黙な性格は、いまの社会に不満を抱いている証拠だ。将来、彼の給料が増え、社会的な地位も高まると、変わるかもしれない。君たちが結婚してからも

う七年間も経った。お互いに理解できて、穏やかな関係が作られている。このようなささやかなことで、悪い結果を招くことはない。これからは休みのとき一人でぶらぶらしているではなく、夫を連れて出かけよう。それで彼も安心できる。あなたも彼は心が狭い人とは思わなくて済む（第三卷第三期）。

次に避妊と夫に移された性病についての相談を見ていく。

編集先生…私は中学校を卒業して故郷へ帰り、二十三歳のときに結婚した。夫との仲はすごくよい。現在で十一年経過した。この十一年間で、子供十人を生んだ。今は三十二歳で、夫は四歳上だ。子供を生みすぎて、私は体に多くのダメージを蒙った。毎日夫に避妊のことを言うが、夫は「自分で決める」と返事する。私はこれからは薬を飲んで避妊しようと思う。貴刊第三卷第二号の信箱で「避妊できる」という言葉を見た。先生に具体的な方法を教えてほしい。

瑞芬女士…十一年で子供十人を生むのは、本当に多すぎる。これは中国の親が子供を欲しがる傾向にあるからで、西洋の男女は決してこんな多くの子供を産まない。一〇〇%の避妊方法はない。しかし、中国の旧式の薬も一つの方法だ―少なくとも九〇%の効果がある。そして、婦人科医者ところで、子宮帽を使うのも一つの方法だ。そして、郭太華医師の避妊に関する本もお勧めだ（第三卷第七期）。

編集先生…私の隣さんは、小さい頃、金持ちの家に童養媳^{注1}に行かせられた。もちろん苦しんでいた。彼女はこのような苦しい生活を何年間か過ごした。今は結婚して、子供を生んだ。夫は家族の店で働き、そしてよく売春所に足を運ぶ。彼女の姑は毎月百元の生活費を彼女に渡す。しかし、最近、彼女の夫が性病にかかり、彼女に移してしまった。家族全員もこのことがわかった。姑は息子を責めるわけではない。一方、使用人に彼女の手伝いをしてはいけないと言いつけた。先生、病を患っている人は、多くの家事ができないのだ。家族はもとと彼女のことを軽視している。この件で、皆も彼女を無視する。賑やかな家庭には彼女の居場所がない。もっとひどいのは、このような裕福な家なのに、病を治す治療代が出せない。皆が彼女を皮肉な目で見ていただけだ。彼女は毎日私に「助けてくれ」と言う。私は先生のことを思い出した。ぜひ力を貸してほしい。

雲霞女士…あなたの友達は本当に不幸な女性だ。病に絡まれ、家族の態度もひどい。私たちはよく考えて、一つの方法を提供する。彼女はしばらく実家へ戻る。発病の原因を考える。嫁ぎ先が彼女の病気を治そうとせず、同情も寄せない、夫も放浪生活を送っている。こ

のような家庭を惜しむ必要がない。そこで非人間的な生活を送るより、すぐに離れたほうがよい。あなたが彼女の様子を彼女の両親に知らせてほしい。両親の助けで病気を治した後、夫との離婚、再婚のことを考えることを勧める(女声三卷七期)。

以上に見てきたように恋愛や結婚、独身主義、および男女の友情の成立をめぐる、恋人の心変わり、貞操問題、既婚者の異性との交際、嫁姑関係、避妊に協力しない夫や風俗遊びの末に妻に性病を移すなど、若い読者の恋愛や結婚をめぐる関心や苦悩が信箱には多く見られた。ここに紹介できたのはわずか四分の一程度であるが、どの手紙も大枠ではこれらの内容と共通するものである。女性が涙を拭いて前を向いて生きていくためには、「自我」を持つことであり、その基底には経済的自立が欠かせないことは、「編集先生」の回答から強く伝わって来たのではないだろうか。経済的自立をはかるためには教育が必要であり、環境に恵まれない人のために、信箱では多くの相談に回答をしている。次章ではその姿を見ていきたい。

第二章 学業継続への道、そして経済的な自立をはかる就職について

『女声』は上海という大都市で刊行されているが、どの地域も上海のように教育機関に恵まれているわけではない。まず、寧波出身の愛芬女史からの手紙から見よう。

編集先生：私は旧式家庭に育った女性で、故郷には高等学校がなく、毎日家事に明け暮れ、書籍と無縁の生活で文章を書く機会もない。私は二十四歳。結婚した夫は上海で商売をしているので、夫は結婚後まもなく上海に移った。家には私一人しかないので空いている時間が多い。引き続き学問をし、社会で活躍する現代女性になりたいと思う。どんな本を読むべきだろうか。

愛芬女史：一般政治と社会状況を把握するなら、毎日新聞を読むべきだ。いま内容が充実しているのは「申報」である。また、中国の歴史と世界の歴史を理解すべきであり、商務出版局或いは中華書局が出版する中学校の歴史テキストを読むことを薦めたい。文芸の修養も重要だ。巴金の「春」、「秋」、「家」と魯迅の作品を薦める。商務印書館が出版した中国文学研究会の本もよい。中国古代の詩、詞及び「古文」もある。外国の著作を読むのもよい。外国の作品は中国より偉大だ。外国語ができないなら、翻訳版を読んでもいい。もっとも薦めるの

はツルゲーネフの「貴族の家」、「父と子」、「煙」などである。トルストイは世界級の文豪で、「復活」や「戦争と平和」などは必読の書だ。内容を理解できなくても構わない。一遍読んで、数日休んで、もう一遍読むこと。そして、日記を書く。日記は自らの生活への記録と検討でもあり、作文と思考力を鍛えるいい方法でもある。以上が初期の自習法である。また手紙を送ってほしい（第二巻第一期）。

この同期号には歩青女史も勉強方法を尋ねているが、経済的理由で学校に通えない女性や青年のために設立した低廉な夜間学校に通うことを回答者は助言している。また、第二巻第四期の凤英女史からの同様の相談に、補習学校も無理であれば古本屋で本を買って自宅で自習、八仙橋の青年会館で本も読めるし、少し保証金を出せば貸し出しもできることを伝えた上で、ゴリキの『私の大学』を引合いにだし、放浪者・ゴリキは、幼年時代から商店で奉公したり、ゴミ箱を掘り出したり、道で捨てられた骨とパンの屑を拾う生活をし、「私の大学は野原だ」と言っていることを伝えている。

なお、以上の回答にある巴金の「春」、「秋」、「家」に言及した投稿もある。封建家庭で育てられた家余君からの手紙である。家余君は、子供時代、家に不満がなかったが、最近、巴金の「家」、「春」、「秋」を読んでから自分の家族に深く不満を持つようになった。しかし、主人公のように反抗できない。或いは、反抗する勇気がない。苦しくなり鏡の前で激しく泣くときがある。家庭に対して、どういう風に対応すべきかとの家余君からの問いかけに対し、「春」、「秋」、「家」は優れた作品だが、時代から見れば少し遅れた内容とも言える。社会には巴金作品での家庭と同じ家庭がまだたくさんあるが、今の時代は「家」、「秋」の時代とは違くと「編集先生」は答えている（第二巻第三号）。この問答から伺えることは、回答者は勉強法を説くうえで巴金の三部作先を薦めたが、それは因習性を客観的に見つめ、それがいかに根拠のないものであり、人間を縛り付けているかを認識させるためもあったのかと思われる。

次に、日本に留学することに関しての相談であるが、回答者は留学の必要を認めていない。以下に要約引用する。

編集先生…私は父の葬儀のため、親戚から借金してしまった。私は母と二人暮らして、大学を卒業したら、すぐ就職しようと思っている。ところが、私の学校には日本へ留学できる制度がある。母は友達の口からこの情報を聞き、私を留学させたがっている。母は親戚がいるので心配はないという。しかし、親戚は娘のように彼女の世話をするわけではないだろうし、家の経済状況も厳しいので、進学する必要があると思う。環境、家庭のため、私は悩んでいる。

琳女史…あなたの問題は確かに今の知識人が悩んでいる問題だ。多くの若者が知識を身に付けた後、道がないと感じる。よりよい道を目指している人間の悩みだ。手紙によると、あなたは教育を受けるだけではなく、特殊な知識レベルに達した人だと見受けられる。自分の知識を台無しにしたくなく、適切な場所を求めたい。それであなたは悩んでいるのだ。一般的に言うところ、学校教育は確かに学校以外の教育より良いのだ。学校が学習の範囲を作るからだ。一方、範囲が定められ、知識が制限される。だから、本気で学問を求める人は学校だけではなく仕事中に勉強できる。日本への留学は、必要なことではない。職業が必要なら、まず職業を見つける。しかし、職業のため、自分を犠牲にしてはいけない。職業生活で、あなたが体験したことを客観的に分析し、仕事のほかに進歩的な書籍を読む。決して生活の奴隷になってはいけない。私たちはあなたが「生」と「死」、「犠牲」と「享受」の意味を理解できと思う。私たちはこの手紙はきつとあなたを満足させないと思うので、あなたは再び解決できない問題を私たちと議論してほしい(第二巻第二期)。

以上のように勉強方法、読むべき書物名などを具体的にあげて自習方法を指導している。ただ、ここで不思議なのが、日本への留学を勧めていないことだ。日清戦争後に中国から日本へ留学する青年は増加したが、女性には男性に比してごく少なかった。日本に留学した青年が知識人となり、その後の中国を牽引していったことを思い起こせば、女子の留学も勧めるべきだと思われるが、日中戦争が激化し軍国国家と化した一九四三年の日本に留学することは危険を伴うことであろう。また、留学よりも職業を求めるべきだとする回答には、『女声』という雑誌が最も発信したいことが「職業による自立」にあるからではないかと推測される。

これまであげてきた記事の中には戦時下であることを意識させられる投稿記事はあまり見られなかったが、第二巻第四期では戦争のために父を失い、生活のために妓女業に身を落とした女性が、その道から脱するための教育を受ける方法を問う手紙が載っている。

編集先生：私は生まれは下劣な人間ではないし、自ら墮落してしまう女ではない。生活に困窮し、仕方がなく嚮導女になってしまった。六年前、私は円満な家庭があった。故郷には、母、兄弟、姉妹もいる。しかし、戦争は私の家を潰して、私の生涯も潰した。父は戦争で亡くなり、兄の消息も途絶えた。怪我をした母の体は不自由になり、残されたのは弟と妹だけだ。この六年間、母、弟と妹は毎日泣いてばかりだ。彼らは労働力にならない。私たちは借金で暮らし、もはやこれ以上の借金が出来なくなった。去年から私は家族の生計のため、個人の幸福を犠牲にして嚮導女になり、舞女^{注2}もやっている。売春業なので社会から軽蔑され、卑劣な人として扱われる。私はこの不

幸な境遇から脱したい。先生が示した道に進みたい。私は六年間の小学校教育を受けた。今年は十六歳だ。私のような者が通う補習学校があるだろうか。そして、妹と弟が無料で入学できる学校はあるか。家族の生活が維持できるならば、どんな苦しい仕事でも構わない。できるだけ早く信箱で回答を載せてほしい。

愛珍女史…私たちはあなたのことに関心を寄せながら、尊敬もしている。あなたは一般の人に墮落者と見られ軽蔑されているかもしれないが、あなた自身は多くの人が持っていない純潔な魂と向上心を持っている。今の状況はあなたの過ちではない。私たちはあなたの苦しみを理解できるし、力になりたい。しかし、今の状況は非常に厳しい。補助学校はあるが、すべて労働者、児童、女工向けだ。私たちはあなたに会って直接話し合いたい。何かの方法が見つかるかもしれない。あなたの住所を私たちに教えてもらえないだろうか（第二巻第四期）。

このように、誌面での助言を超えて直接対話を求め、そのうえでの解決策を立てる姿勢を示している。その後の経緯については信箱には載っていない。だが、この三期後には貧しくて学校に通えない人のために、具体的な学校名を上げて助言しているので見ていこう。

編集先生…私は文芸が好きで『女声』の忠実な読者だ。創刊号から今まで毎号読んでいます。女の利益に緊密に関わる問題も読んでほしい。運命は私を弄んで、戦争は私の家を潰した。家族がばらばらになり、もう一度戻れる日がくるかわからない。戦争後、幸いに職員の地位をもらって、毎日筆と紙の生活をして、仕事が終わると、孤独に下宿に戻る。給料が少なくて、自分の生活を維持するのも難しい。私は四時に退勤した後、簿記或はほかの専門知識を補充したいが、経済的にはそんな余裕がない。私は自分の前途を心配している。家なし、専門技術なし、知識なしの人は社会で生きられないのだ。先生、上海で無料の補習学校を紹介してくれないだろうか。また、暇なとき、どんな本を読んだほうがいいだろうか。筆耕などのアルバイトはあるか。今の給料で生きられないからだ。私は静かな所が好きで、病院或は孤児院での仕事を紹介してもらいたい。

琮女史…上海には補習学校が多い、学費がそれぞれ違っている。商業ベースの学校もある。だが、どんな学校でもある程度の費用が必要だ。今二つの学校を紹介する。（一）上海東公社―アドレスは福州通りと浙江通りの交差点だ。上海江大学社会学専攻が設立した学校だ。国語、外国語、数学、簿記などの分野がある。歴史が長い学校だ。午後七時から授業が始まる。本学期も開始するので、来学期からやったほう

がいい。（二）、志成補習夜間学校。授業時間は夜七時から九時までだ。復旦大学の学生が多い。受講生はほぼ女工と職員だ。費用は高くない。入学するとき、保証金を納めて、授業が終わるまで欠席がないなら、保証金を返す。先生も復旦大学教育専攻の卒業生だ。あなたは病院あるいは孤児院に就職したが、専門知識が必要なので簡単なことではない。あなたの境遇はたしかに不幸だ。新しい職を見つけるのも大変なので、決まるまでは今の職を辞めないほうがいい。そして、補習学校へ行つて、入力、速記、簿記など実用性が高い学問を勧める。アルバイトのことについて、私たちはまだ紹介できない（第二巻第七期）。

続けて戦災によって引き起こされた苦悩による相談を見ていこう。

編集先生：私は多くの苦しみを味わった女で、今まで努力しているのに、出口が見られない。戦争は私の家を壊し、両親の命を奪った。一人になった私は居候の身になる。よく人々に冷遇され、人間の腹黒さを痛感している。私の精神は心楽しくなく、一日中も憂鬱を舐めている。日々暗い蔭の下で暮らしている。そして、私の苦しさを理解してくれる人もいない。私の故郷は遠くの広西にある。帰りたいがお金がないので帰れない。私は職業を見つけない。私は幼いころから病気がちで發育不全、背が低く顔だちも普通、中学校しか卒業していない。何度も友だちに職の依頼をしたが、真剣に取りあってもえなかった。私は自分の力で生きる経済力がほしい。（一）、私は簿記と中国語タイプを学んでいる。先生は慈善事業機関での職を紹介してくれないか。筆耕員でもいい。私は病院で看護婦の知識を勉強したい、そしてこれを生涯の職としてやりたい。（二）、もし先生が紹介してくれないなら、私は雑誌書籍を売る店を出したい。私は文芸が好きなので、稼ぎながら本も読める。この事業について経験がないので、成功できるか、生活を維持できるか。

恵貞女史：私たちはあなたの遭遇に同情を寄せる。確かに、居候の身になるのは辛いことだ。あなたは簿記と中国語タイプを知っていて、仕事を探すのは難しくないと思う。しかし、今は失業する人が多くて、私たちも慈善事業機関と特別な関係を持っていないので、すぐ就職口を見つけるのは難しい。あなたが本を売る売店を出す勇氣を持っているのはとてもよいことだ。少ない資本とあなたの精神と時間をかけて、人間に精神の食料を売るのは社会に貢献できることだ。あなたの地位が下がるわけではない。もし、売店を経営する人を貶める人があるなら、それはその人の知識、修養が足りないからだ。これらの連中に対して無視すればいい。そして、売店を出すのは慈善事業機関での職員になるよりよいと思う。第一、時間が自由だ。自分の働く時間が自分で決められる。さまざまなお客さん

がないとき、読み放題となる。あなたは文芸が好きなのだから。だが、文芸の修養は、ただ本でのみ学び取るわけではない。本のほかに生の知識も必要だ。大通りは生きている知識を手に入れる一番よい授業だ。あなたは通りかかる人間を観察できるし、新しい事件も見られる。今は清明の時期、雨が降り続けるが、あなたの問題に感動して、私たちはわざわざ売店の女主人を訪問した。彼女によると、店を出す開店資金は約一二千ぐらいで、毎日平均千円の売り上げがあり、資本を除き、利潤は二百ぐらいだ。毎月六千円だ。この収入は上海の中上レベルだ。金を借りるについても、私たちは新聞社に聞いた。新聞社に行って登録すれば、最大五百元が貸してもらえる。もし、あなたに勇気があり、自分も一部分の資金を調達できれば、私たちはあなたを申新聞社に紹介してあげる。本と雑誌の定期購買の手続きを簡単にして、店を出す場所については飛霞通りと長江西通りの辺りで、にぎやかな場所がよい。しかし、ほかの人も店を出しているなら、隣りに出していない。ほかの店主に恨まれるからだ（第三巻第一期）。

以上のように、本の売店を開業することを応援し、積極的に背中を押している。わざわざ売店に聞きに行き、資金の援助についても新聞社に直接問い合わせている。

次に女優になりたい女性からの相談である。

編集先生…今の非常に厳しい時代に、私は両親の力で学校に入れたのありがたいことだ。もともと私は大きな野望を抱いて、国内の一番の大学に進学するつもりだが、この半年の様子を見ると、不可能なことだと認識している。一方、学習は必ず学校に限るわけではなくとも意識してきた。社会もよい学校だ。高校で勉強している幾何学は私の興味を引かない。この授業を受けるときは本当につらい。大切な時間をこのように無題にするのはもったいない。私は早く好きな仕事をやるほうが、もっとよいのかもしれない。私は虚栄心が極めて強い女かもしれない。私は人間がこの世で無名のままで平凡な人生を送るのはあまりにも無意味だと思う。私は人間として、非凡な生活を送って、生きるときは全人類の幸福に力を尽くし、死んだあと、少なくとも短時間の間人々に忘れられない存在になりたい。環境が私に与える影響が強すぎるのかもしれない。私はこういう信念を持っている。世の中の貧乏な人間の様子を見ると、悲しくて涙もこぼれてしまう。両親が一生懸命にお金を稼ぎ、私を学校に通わせてくれる。彼らに金銭を負担させ、幸福な生活を送っている私はだんだん不安になる。

そこで私は劇界で就職したいと思うようになった。しかし、父が相当な社会的な地位にある人間だ。女優になるのは絶対に許されない。地位を持った人の娘が女優になるなんて人々に笑われるに決まっている。編集者先生、私が女優になるのは下品なことではないと思う。社会の闇、人間の腐敗しきった生活を暴露し、誤った道に入る人を反省させ、意志が弱い人を励まし、人間がこの世をよりはっきり認識させるのはよい仕事ではないだろうか。そして、私は活発なので、一日中座っている仕事を好きにはなれない。私の生活が平凡すぎるかもしれない。私は平凡な生活を体験したい。女優になることは下劣で間違ったことなのか。私の生活に適するほかの仕事があるだろうか。

藩さん…あなたの出発点はよい。しかし、この道は非常に危ない。劇、映画を演じるのはほかの仕事と同じ、下劣ではなく、非常に高尚な仕事だ。しかし、注意すべきことは、今の中国の映画業はまだ発達段階にあり、普通の俳優が受けた教育はまだ浅いものだ。特に、ある後援者たちは俳優のすばらしい演技に感心していない。映画界のみにくい内幕が現れても来る。もしあなたが女優になりたいなら、魂と肉体を保つため、人付き合いに注意しなければならない。そして、あなたが勉強する機会があるなら、若くて記憶力がよいうちに、読書をしたほうがいい。学問は人生の道具だ。道具があれば、自分の要求に達するに違いない。勉強する機会があるとき勉強しなくて、後で後悔しても、やり直せない人間は多く見られる。私たちはあなたもそういう人間にならないでほしい。生活が平凡だと思うのだろうか。さまざまな友達を作るのはどうだろう。女工、郵便員、商店弟子、医者、売春婦、作家など。彼らのところで生活経験を吸収する。実際の生活経験も意味があるものではないか(第三巻第三期)。

編集先生…私は貴刊の忠実な読者だ。多くの女性の苦しみを見て、私も自分のささやかな力に貢献したい。多くの出身のよいお嬢さんは戦争のせいで家を失って、苦しい生活を経験せざるを得ない。私もこの中の一人だ。でも、幸いに職を紹介してくれたので、生活もだんだんよくなっている。私は高校教育を受けたが、成績が悪くて恥ずかしいことだ。多くの女性の苦しみを見て、彼女たちに職を紹介する。昨日ある友人に頼まれたので、百貨店の女性店員三、五人を募集する。以下の条件がある。(一)、書写、計算に精通し、少なくとも小学校以上の教育を受けた人。(二)、人品と容貌が優れて、喫煙、賭博など不良嗜好がない人。(三)、性格が温和で、苦勞を耐え忍べる人。仕事が忙しくても文句を言わない人。(四)、よく微笑んでいる人。(五)、楽器の上手な人。(六)、十三歳から十八歳までの未婚者。(七)、蘇州の南北出身であること。(八)、以上の条件に合う人は名前と住所を来月の雑誌で載せてください。そして、この以下の問題について

先生と話し合いたい。（二）、雑誌で女性の職を紹介するコラムを設立できるか。（三）、学校、百貨店、工場での求職を原則として、女性の情報を共有しても差し支えないか。（四）、ある程度のお金はあるが、単独経営ができない女性をお互いに紹介し合って、共同で経営しよう。女性が幸福になるように、私の力を女性に貢献させてほしい。

秋華女史…本場にありがとうございます。戦争の影響で、亡命する女性は確かに多い。あなたが助けてくれて本当に幸運だ。あなたの他の女性に対する援助精神に感心し、手紙をそのまま雑誌に載せさせてもらった。しかし、あなたは住所を書いてないので、読者は直接あなたと連絡できない。そのため、まずあなたの住所を教えてください。そして、紹介という責任のため、以下のいくつかの点を強調したい。（一）、本社は紹介以外に、ほかの責任を一切負わない。（二）、手紙の第五条、楽器が上手という条件がある。楽器は個人の趣味で、仕事と関係ないと思う。この条件がある理由は何か。（三）、応募したい人は十五日までに履歴を本社に郵送してください。そして、あなたが付け加えた三つの問題は面白くて意義があると思う。国外には、学校がよく学生の情報と会社を共有する。しかし、今の上海は戦争の関係で、そうしてはいけない。将来、読者と編集者の関係がより密接になったとき、あなたの希望通りやってみたいと思う（第三巻第四期）。以上に見られるように、これまでは読者から『女声』に就職の斡旋依頼はあったが、秋華女史からの手紙は読者を助けるための就職の懸念もあるように見受けられる。そのための防御線が敷かれているが、『女声』がそのような周旋業のような性格を帯びてしまつてよいのかとの機関として活躍するには、「今の上海は戦争の関係で、そうしてはいけない」という言葉は重く響くであろう。

第三章 『女声』を構成する記事内容および余声について

本章では、信箱に寄せられた読者から誌面に対する要望や意見を主に見ていく。そして、各号の余声の中から主要な記事を時系列順に見ていくとする。

第二巻第一期の余声には、読者からいろいろな手紙を受け取ったが紙幅のため即答できない、着信日付順に対処しているので待つてほ

しいとある。手紙の中には多くの問題が山積していて、迅速に対応したいので、読者たちはできるだけ内容を短く書くよう努めてほしいとあり、この通知が功を奏して、以降の信箱には箇条書きで相談用件がまとめられているものが多くなった。また、『女声』創刊一年を経過して二年目に入った時点においても信箱への投稿者は依然多くいることが伺える。

第二巻二期の「余声」は、紙の値段の高騰により値上げする知らせが掲載された。また、読者からの投稿記事について原稿料を出しているの、知らせを受けたらできるだけ早く取りに来てほしい、その際は印鑑持参をと呼びかけている。また、読者からのバックナンバー購入希望の手紙を受けるが種々の理由から実現できないことや、『女声』の目的は読者の社会問題、女性問題および思想問題を解決することにあるので、医学上の問題は解決できない、たとえば、肺病或いは性病にかかった人と結婚できるかというような問題などは医者に相談してほしいと綴られている。

第二巻三期の余声は、朱朗君の文章を掲載後、読者から二重投稿の報告を受け、二度と起こらないよう努める旨を読者に伝えたが、再び読者から第一巻第十二期掲載、雨玲君の「小花」は既に一昨年の新聞の文芸欄で発表された作品だとの指摘を受けた。作者は牧良、「毒酒を飲む」というタイトルで証拠もある。読者に深謝するとともに、投稿者に文人の名誉を大事し、盗作しないように呼びかけている。

また、信箱の手紙が多すぎるので、全部回答できないために、しばらく折衷案を採用することにしたとある。多くの男女に関する問題なら、手紙と回答を一緒に刊行する。ほかの場合は回答しか載せない。完全な個人問題あるいは簡単な問題なら、弊社は個人的に回答する。信箱で発表しないのは、紙幅の制限があるからだ。紙の価格高騰のために、今期から三元から五元に値上げ、年刊は五十五円で、半年間は二十八元になることを知らせている。

翌月の第二巻第四期からは、毎号六元になり、年間六十六元、半年間は三十四元になるとの記事があり、続けて値上げされている。他にも同期の余声には、読者に一般女性の知識レベルを理解してもらうために、手紙は編集部で訂正や添削しないでそのままに載せたほうがいいと思い、私たちは信箱で手紙の原文を載せるとある。

さて、次に信箱に寄せられた記事内容に対する要望や書き手に対する質問が寄せられている手紙を紹介しよう。

編集先生…私は貴刊の愛読者で、創刊以来毎号読んでいます。私は幾つかの意見を貴刊に呈したい。一、貴刊は短い評論、雑記、生活に

関する文章を載せてくれるだろうか。もし、読者のコラムで上手ではない文章を発表できるならありがたい。読者も創作に興味を持つようになるだろう。二、私と友達も民間文学が好きだ。「彼女の一生」に興味を持つている。楽未央先生の筆致が生き生きして、材料も充実している。楽先生の資料収集の方法を教えてほしい。これからも楽先生の民間文学に関する文章が読めるだろうか。三、よく貴刊で詩を発表している歌青春は関露女史であるのか。関露女史は詩の作り方を教えてくれるだろうか。

萍女史…こんなに詳しく女声を読んでくれてありがたい。あなたの二番目の問題と三番目の問題は一つになれる。楽未央は歌青春だからだ。彼はよく女声に投稿し、中国旧文学に詳しくて、思想も純正だ。彼は読書量も多い。「彼女の一生」とほかの作品も彼の創作だ。作者から「彼女の一生」を書くための資料についての回答は以下の通りである。

一、鐘敬文編…歌論集。二、劉経編…歌と婦人。三、朱雨尊編…民間歌全集。四…姫歩周編…淮北歌。五…羅香林編…東広州の風俗。六…洪亮編…浙江歌、など（第二巻第五期）。

以上の話題に上っている著者については別稿で述べる予定である。先にも名が挙がったが関露について「中日文化の交流を強める現在、本社の編集員、関露女史は日本の東南アジア文学者代表大会に出席し、本号の『東京寄語』は彼女が東京から送ったものだ」と記されている。ちなみに、第二巻五期までの編集室の住所は、上海愛多亜路一六〇号、二〇七・二一〇室、発行所と印刷者は同所の住所、上海小沙渡路四八九号である。毎月十五日出版、六元。

第二巻第六期からの編集室の住所は、上海博物院路一四二号 光陸大樓内 四九室、発行所と印刷者は変更なし。毎月十五日出版、同じく六元とある。

第二巻第六期の余声は、「歌青春の詩作、例えば本号の『開学』『病中吟』の旨さと趣旨を教えてください」との手紙について、「私たちはこの問題は信箱の範囲ではなく、詩歌鑑賞の内容だと思う。しかし、本刊には詩歌批評を書く人がいないので、ここで歌青春先生は手紙の方式で自分の詩の〈趣旨〉を答えてほしい。」と記している。また度々の二重投稿の注意文があげられている。

次に見るのも記事内容についての意見である。

編集先生…私は第二巻第五号を読んだ後、個人的な意見がわいた。文芸欄の「ある論争」という文章は女性の政治参与問題を議論して

いる。結果に私は失望している。どうして「男が女を圧迫しないと」「男になれないか」。私はこの点について本当に分からない。男子も国民の一部分で、女子も国民の一部分だ。女性がいないと、国、社会、家庭も成立しない。同じく重要で、同じ人間なのに、どうして女は圧迫されるのか。私は男として、女性を圧迫してはいけないと思う。災難を共に負担し、権利も同享すべきだ。先生はどう思うか。

亮文君…私たちは君の意見に賛成する。しかし、君は作者の意思を誤解している。作者は「男性は女性を圧迫しなければならない。自己中心的にならなければならない」と述べているのは、今の男性中心の社会制度が根本的に男権を保障しているのを指す。男性は誤った社会制度で自己中心の思想を覚える。自分の利益のため、女性を圧迫するのは避けられないことだ。だからこそ、女は積極的に自分の利益を求めなければならない（第二巻第八期）。

なお、前後するが第二巻第七期の余声は、本刊は創刊以来、読者から愛されてきたが、紙数が制限されているので、印刷量が一定しかできない（売り切れてしまう）。本雑誌の申込者は、もし出版一週間以内に雑誌を受け取っていないなら早く連絡してほしいとある。また奥付によると発行所・発行者の住所が変更になっている。変更後の住所は、上海西康路四八九号、値段は変わらず六元である。第二巻第九期の余声には、毎号は十元になり、年間百元、半年間五十六元になるとの通達が載っている。また、本期から本誌の表紙を飾るのは、女画家陳小翠女史であること、彼女は一年に渡り「紅樓夢」での十二金簪を描く予定であること、本期の表紙絵本号は薛宝钗であることが記されている。

第二期第十期の余声では、私たちは紙幅の関係で読者からくる信箱宛ての手紙と回答を十分に載せられない。そのためにすぐに回答することは無理なので待つてほしいと余声で書いた。しかし、最近ある読者の手紙を受け取った。私たちは無責任者で、消費者を騙していると責められた。信箱の編集者はこの手紙を読んで、泣くに泣けず、笑うに笑えないと感じた。だが、よく考えてみると、この読者は私たちを責めてはいるが、その源は信箱を信じて期待しているから生じる不平や不満だろう。私たちはこれからも読者の問題を忠実に答える。だから読者たちも私たちの遅い答えに対して理解してもらいたい。私たちは毎日数通の手紙を受けるが、月一回の信箱で全てを載せられないのだ。私たちは力を尽くして責任を負う。騙す必要もない、騙そうとする気もない。

先に上げた女性画家陳小翠女史に『紅樓夢』での十二金簪の絵を表紙として画いてもらおうつもりだったのだが、陳女史は病気で画けな

くなったので、辞めることになった。また紙代金が高くなり、本雑誌の販売価格も十五元に引き上げられることになる。年間百六十五元で、半年は八十五元である。ちなみに価格は第三卷九期には七〇元に上がり、第十期が百元、十一期から十二期が百五十元と急速に値上がりしている。

以上が第二期第十期の余声のあらましかが、信箱人気のほどがわかる。そして戦時下における物資不足は激しく、『女声』もここにきて急激な高騰である。次に見るのは信箱掲載記事に自分の名前が使われた人のクレームである。

編集者様…突然貴刊で私の名前が載っているのを見た。そしてわけがわからない問題も掲載されている。私は悲しくてたまらない。純潔な少女なのに、どうして人々に論議されるのか。そして、雑誌にも載っている。これは本当に想像のつかないことだ。私は常州で勉強するが、自分のことに集中しあまり外界と接していない。恋愛などは最も論外である。これはすべて狡猾な人の作り話だ。私の名誉を汚している。今の社会はこんな暗いものなのか。今私は幾つかの問題を聞きたい。一、壊された名誉をどんな方法で取り戻せるか。二、このような悪人を罰する方法があるか。三、あの手紙を送る人は住所を書いたか。信箱で私の手紙を載せてもらいたい。

欲秀女史…本当に悲しいことだ。作り話で人の名誉を汚すつまらない人もいる。本当に申し訳ない。あの手紙が作偽者によるものだと私は思わなかった。あなたの立場に立てば、本当に許されないことだ。しかし、自分の行為さえ正しければ、名誉は汚されないものだ。このような人間に対して、無視するなら、彼も面白くないと思つて止めることになる。あなたが若い利口な女性で、これから勉強に集中し、偉大な目標に向かって、この偽手紙のことを忘れよう。人が聞いたら、知らないと答えれば十分だ。あなたは成績がよく、人格がよいなら皆があなたの事を信じるに違いない。作為者を罰することについてだが、そのまま無視したらどうだろう。彼は住所を書いてない、私たちも知らない。そして、手紙を送ってくる読者は本当の問題を聞いてほしい。両者の精神が無駄にならないように。私たちの信箱は若い男女のために真面目にやっているものだ。冗談で扱わないでほしい（第二卷十二期）。

以上のことからわかるのは、信箱掲載記事は住所が書かれていない投稿者からのものも載せているということである。手紙の内容を信じる根拠をどこに置いているのだろうか。上海や地方に生きる『女声』愛読者たちが抱く問題意識、主張、苦悩。様々な声を拾い上げる場所が「信箱」であるが、虚偽の手紙が掲載されることは、雑誌の信用を著しく損なうものであろう。このクレームを寄せた女性に対し、

謝罪文よりも「無視せよ」という回答も、疑問を感じさせるものである。女性たちの声と手紙文が一致したものと判断するのは、「編集先生」の直感に過ぎないのだろうか。せて住所と氏名がきちんと書かれているものを扱うべきかと思われるが、その選択基準が明らかにされていないので、この問題はこれ以上の論究はできない。

次に紹介するのは余声第二巻十二期掲載のものである。

今刊は特約女高音声楽家の茅愛立女史の原稿「声楽の勉強方法」をいただいた。まことにありがたい。茅女史は歌王様蘇士林の得意門生で、音楽の才能があると思われる。彼女のことは重視されている。茅女史は若くて、努力して、蘭心劇場と青年会で演奏会を行い、音楽を知っている人々に評価されている。「声楽の勉強方法」という文章は普通の声楽の学習法に関する内容である。これからも彼女に専門的なものを書いてほしいので、声楽に興味がある読者はこれから注目してほしい。彼女は、四月末から五月初めにかけて演奏会を行うそうだ。

歌青春先生は目の病気で、長い間私たちに原稿を提供できなくなったが、今はもう治って、これからまた先生の原稿がもらえるようになった。大変楽しみである。承予先生の前稿もありがたい。

なお、読者が別々に答えてもらいたい問題および原稿があるなら、返信用の切手も同封してほしい。そして、信箱の投稿者は第三者の名誉を汚す手紙を送らないください。ほかの人の代わりに問題を書くなら、本当の名前と住所を書いてください。他人に迷惑を掛けないでほしい。本刊の二週年記念のため、数篇の文章を募集している。募集のお知らせを注意してほしい（第二巻十二期）。

次に見るのは質の低下を訴える信箱に寄せられたクレームである。要約して紹介する。

編集先生…貴刊は上海で唯一の女性雑誌として、私たちは毎期読んでいます。そして友達のように貴刊を扱っている。私たちは毎期の内容が前よりよくなることを期待している。しかし、私たちは貴刊を愛する立場に立って言わせてもらえば、最近の数期は質が高くない気がする。たとえば、三巻二期で掲載している「各家」の文章の中で、数編の内容が不充実だと思う。私たちは以下の問題を聞きたい。（一）、私たちは昔掲載した「彼女の一生」というような文章が好きだ。しかし、連載の後半を読めていない。買いたいのだが、買えるか。以前、信箱で楽未央先生に民の歌の創作方法を聞いた手紙があるが、楽未央は返事をしていない。そして、その後、楽未央先生の作品が少なく

なった。なぜか。（二）、前期に載った「詩人秋謹」という文章はすごくよい作品だ。その後、話劇で徐錫靈が秋謹にプロポーズするという一幕を見た。これは作り話なのだろうか。（三）、よく貴刊で詩を発表する歌青春の名前を見る。この「先生」は男性か、それとも女性か。私たちは先生の作品を読んで、感心している。「先生」に直接手紙を送りたいが、これは可能だろうか。

あるいたずら好きな女の子・昔の雑誌の在庫がないので、もし買いたいなら、書局で探してみてください。楽未央先生は歌青春先生だ。彼は女性ではない。もし、彼と連絡したいなら、寧波路小説月報社丁英さんに手紙を送ってください。彼が返事する（第三卷第十一期）。質の低下に対するクレームについての回答はない。信箱に寄せられる度々の声から、歌青春の人氣が高いことが伺える。

第四章 男声—男性投稿者による信箱

本誌創刊にあたってのマニフェストともいうべき巻頭語には、「女性の声」—女性に関する問題、「女性のために出す声」—女性問題を改善するための「女声が出す声」—女性が作った雑誌、この三点が叶うように、できるだけ女性に役立つ良い影響が与えられる文章を載せ、出来る限り女性が書いた文章を載せると宣言されていた。表記方法に従えば三期十二期に至る総数三十六冊は、後半に向かうにあたって信箱投稿者は男性読者からのものが増えてきた。正確な査定はできないが、恐らく最初に見られる信箱の男性投稿者からのものは、第二卷第七期からであり総数三十六冊のちょうど後半に向かう折り返し地点からといえる。男性の声が女性の声に交錯し、戦時下の上海におかれた『女声』はどのような様相を見せていくのであろうか。最後の章である本章では、男性からの声を見ていくとする。まず最初の掲載から見ていこう。

編集先生…私は職業青年だ。夜間学校に通い同じクラスで学年が違う女性を好きになり、彼女に手紙を渡した。私はただ彼女と友達になりたいだけで、ほかの邪念はない。彼女からは「あなたは頭がおかしいのか」と言われた。以下を先生に聞きたい。（一）、彼女の拒絶は環境と関わるか。（二）、若い男女は友達になれるか、私の行動が軽率なのだろうか。（三）、私の人格はこれに影響されるか。これから彼女は私を軽蔑するか。

恥ずかしい君…多くの若い男女は愛情を神秘化しすぎる。「男」と「女」の区別もはっきりしすぎる。一眼惚れはあり得ることだが、一言も喋っていないのに、手紙で気持ちを伝えるのは確かに軽率だ。今の段階で、君らはただの同級生だ。彼女は率直な少女かもしれない。（二）、彼女が君を拒絶するのは君の方法が悪い。（三）、若いとき、男女はもちろん友達になれる。（三）、君の人格は影響されてない。しかし、君を軽蔑するかどうかは彼女の問題だ。私たちは知らない。学校は勉強する場所だ（第二巻第七期）。

この男性投稿者トップバッターの相談は、片思いの悩みである。これまで見てきた女性投稿者からの深刻な悩みと比べて、かなり他愛ないもののように映る。次の投稿は、これまでも女性の投稿者から寄せられてきた相談にしばしば上がってきた、親が勝手に決める意に沿わない結婚についての苦悩である。

編集先生…私は『女声』の忠実な読者で、第一期から毎期読んで様々な知識を頂いた。『女声』は確かによい雑誌で、特に信箱というコラムは、いろいろな青年男女に幸福を与えている。自分の力で決められないことを、短い時間で一番よい答えがもらえる。深い学識を持った先生が懇意に読者の問題に答えている姿は、いつも感心させられる。私も解決できない問題があり、先生のアドバイスをお願いしたい。私は二十代の貿易会社勤務の青年だ。十七歳のとき、友達に連れられて上海に来て、読友工場で練習生として働いていた。今はほかの工場に転勤し、従業員になっている。上海に着いた二年目、十九歳の時、父が故郷で縁談を調べた。私はこの件について何も知らなかった。婚約者は私の従姉だ。私は強烈に抗議し故郷へ婚約を解消する手紙を送った。ようやく返事が来て、婚約の解消を断られた。親は強制的な手段で息子に嫌なことを受け入れさせる。彼女は何の知識もない田舎もので、纏足をする弱い女性である。彼女は私の従姉で、私は親戚での婚姻に反対する。子供の頃からお互いに知っていて、二人の間に愛情というものはない。こんな盲目的な婚姻、私は受け入れられない。しかし、親の意思に従って、二十歳のとき彼女と結婚した。今は非常に後悔している。結婚式は故郷で行った旧式なもので、その後一ヶ月ぐらい故郷に住んでいた。その一ヶ月の間、一日中、声も出さない日もある。同じベッドで寝るのに、思想がぜんぜん通じない。幸福なんか見えない。二人は形式上の夫婦に過ぎない。八三事件が起こった後、私は再び故郷へ帰って、翌年の二月に上海へ戻ってきた。家に半年ぐらい住んでいたが、二人の関係は結婚する前の様子と何ら変わりもない。両親も気づいて、後悔するようになる。八三事件の帰省からもう六年経た。去年の九月に私はもう一度故郷へ帰った。今度の様子は前と比べて良いように見えるが、これは母を安心

させるための私の仕業だ。妻のことを思い出すと、非常に苦しくなる。未来への希望がなく、幸福も私から離れていく気がする。正直に言う、すぐ彼女と離婚しないと気がすまない。しかし、これは難しいことだ。二人とも田舎に住んでいて、年長者たちは非常に頑固だ。そして、故郷で離婚する人は殆どない。もし、私たちが離婚するのなら、大騒ぎになるに違いない。目上の人たちに怒らせるだけではなく、親戚も隣さんにも嘲笑われる。私は迷っている。どうすればいいか全然見当がつかない。

沢民先生…あなたが負っている強制婚姻に憤慨し残念に思う。こんな不幸な事が起こるのは、中国の旧勢力がまだ残っているからだ。これは本当に広範囲の問題だ。しかし、この陳腐な勢力に食い込んだのは前の世代の人々だ。若者たちがやるべきことは、この勢力が自分の利益を侵害すると抵抗することである。あなたの婚姻は初めから受け入れられないはずだ。息子は親孝行をしても、自分の前途と幸福を犠牲にするわけではない。離婚するのは確かに一つの方法だ。お互いに愛していない男女が一緒に暮らすのは、二人にとっても苦しいことだ。あなたが離婚しようと思うのなら、徹底的に実行すべきだ。下らない世間など気にする必要はない。あなたは婚約の苦しさを知っているのに、親孝行のため結婚した。今のあなたも苦痛を痛感して、この苦痛を解消するため離婚しようとする。もし無知者たちの嘲笑を怖がって実行しないなら、あなたの前途を妨害する大きな壁になるだろう。私たちの意見は、まず、妻を改造する。もし彼女の無知しかな不満がないなら、知識を教えてあげたり、本を読ませたり、彼女を知識人にするために努力する。これは難しいことだが、もし、あなたが望むならやってみてほしい。もし、彼女に対して絶望的になったら、彼女がまだ再婚できる若いうちに離婚する。あなたの故郷が離婚する前例がないゆえに生じる周りの非難などは、あなたを止める理由ではない。このような非難はもともと一種の罪であり、数え切れない男女の幸福がそれらに壊されている。あなたは勇気をもって反抗すべきだ（第二巻第十期）。

以上のように男性からの手紙にも因習を打破すべきであると真摯に答えている。次に紹介する手紙も因習に従って結婚したものの、不満が高まって他の女性との結婚を望むが、残された妻子のことを想うと実行に移せない苦悩を述べたものである。

編集先生…私は二十五歳の青年で、六年前に父がなくなり、その後母がずっと寂しく悲しみに沈んでいる。母が結婚のことを話したとき、私は一応反対したが、親戚たちに説得され、親孝行のため同意した。それが大失敗の元であった。彼女は田舎の女性で、もちろん辺鄙な環境で育っていて、思想も簡単に頑固なものだ。私たちの間には感情すらないのだ。彼女からは私に対して冷淡な態度しか見られな

い。去年の夏、私は隣の女を愛するようになる。彼女は若くて利口で、新思想を持ち、熱情もあり、冷静でもある。このような女性でなければ私の愛の基準に達していないと思う。私たちは恋に落ちた。最近、彼女と婚約をしようと思ったが、私が自分の妻と去年の冬に生まれた娘を思い出すと、すべての理想が幻滅してしまう。私はまだ若いので、幸福がほしい。しかし、私の可哀相な妻をどうすればいいのか。確かに、私たちは愛し合っていない。私たちは離婚できる。このような封建社会で、彼女は罪のない人間で彼女は旧制度の犠牲者となってしまう。しかし、離婚しなくては私の気が済まない。永遠にこんな寂しい生活を送るのか。生涯の幸福を捨てるのか。私は罪を犯したくないし罰も受けたくない。私はこれ以上迷ってはいけない。幸福の門も開いていて、間もなく閉まる時がくる。私は苦しんでいる。先生の助けを求める。

希明さん…この二つの問題も厳しいものだ。まず君は結婚していて、妻は可哀相であるし無罪である。もう一つは、あなたが女性の友達と恋に落ちて、もう別れられない程度に達していることだ。二つの問題は解決し難く深刻なものだ。妻にしても彼女にしても気軽に処理しないでほしい。つまり、両方ともに真面目に解決しなければならぬ。人間の感情は自然に生まれ、自然に消えるものだ。消えるとき、無理に維持しようとしてはならないし、生まれるときも抑えてはいけない。彼女への感情が自然に出てきて、相手も自分の理想に適する人間だ。それで、今の婚姻に不満を感じ他の感情を求める。これはもちろん自然の人情に合うことだ。いま、解決策を考えなければならぬ。唯一の方法は妻と離婚し、彼女と結婚することだ。しかし、君の奥さんは無罪だ。ただ君が彼女のことを好きではないという理由からだ。彼女は君の事を気に入らないわけでもない。すると、彼女は離婚を受け入れないかもしれない。離婚しないと、再婚もできない。さて、私たちの意見を述べる。離婚は一人のことではなく、君の問題はまず離婚から解決したほうがいい。まず、第一歩、親しんだ親戚、友達などと話し合って、夫婦の感情も維持できないということを君の奥さんに話す。これはもちろん残酷なことだが、二人の幸福と前途のため、やらなければならない。彼女がまだ若いうちに再婚のことを説得する。もし、この方法が無効ならば、無理しないで、二番目の方法を使う。彼女に教育を受けさせる。彼女を学校に行かせる。彼女の知識と能力を強め、友達も作る。彼女を経済的にも独立できるようにさせる。そして、彼女が主動的に君たちの婚姻の辛さを感じ取り、他の途を探そうとすれば解決できる。それまでの間に君が彼女と友達、恋愛同士の関係を保ち、もっと理知的に生活の範囲を広げよう。今の誤った社会制度で、私たちは犠牲者だ。恋愛のほかに、いろ

いろいろな困難もある。私たちより何倍も苦しんでいる人もいる。私たちは積極的、勇敢、冷静な態度で困難をくぐり抜けられるはずだ（第二卷第十二期）。

この回答は、不幸の源は女性が教育を受けていないために起こることなので、婚約者の女性に教育を与えれば、女性も変わるし、離婚に向けての解決方法も見つかるだろうという主旨であろう。これまでの相談は封建思想の犠牲になる女性へそこから抜け出すための道筋を示したものであるが、男性からの相談は相手の女性に教育を与えて、関係性を変革させよというものである。男性からの相談であつても、やはり『女声』の中心は、女性の教育やエンパワーにある。次に見るのは小公卿についての相談である。

編集先生…私はある商店で丁稚奉公をしている。給料が安いし、自分の性格が商人に合わないような気がして、人生がだんだん苦しく思えてくる。私は頑丈で屈服しがたい性格で、頭を下げたくない（ごまをするのが嫌である）、自由を愛し、議論が好きだ。しかし、商店に入ると、いろんな自由を失ってしまつて、人生は苦痛の連続のように思える。また、店のマネージャはお世辞が好きであり、私のような頑固な人を見ると、敵を見るように、よく白い目で私を見る。いつも一番つらいことを私にやらせる。私は生活のため、彼に反抗する立場にない。最近、私はつらい心の病にかかつてしまった。生活が詰まらなくてたまらない。私はまるで無人島にさらわれ、周りには茫々たる海で、頭を上げると、神秘的な空が見られるというような感じがある。この鉛の塊のような空気に私は包まれている。私は人生がただ耐えられない悲劇だと思つて、何度もこの世を去ろうとするが、頭の中で亡くなった母と兄、妹の顔が浮かんで、ついに死の決心が鈍つてしまう。不眠症にかかり、毎日三、四時間しか眠れなくなる。いまひどく痩せてしまつている。どこから私の人生の道を開いていけばよいのか。

丘陵君…「徒弟問題」は深刻な社会問題だ。店の主人は自分の利益しか考えていなく、徒弟の生活と健康は少しも目を向いていない。しかし、今の乱世で、商店を見つけて生計を維持するのは難しいことだ。物質生活の面で、君はもちろん主人たちと比べられないが、精神上あるいは良心から見れば、自分の力で生きられる人は尊敬すべき存在だ。健康が損なわれないなら、しばらく我慢してください。ほかの人を無視して、自分の仕事を完璧に完成するなら、主人も君を信じるようになる。しかし、いまあなたの体は不健康だ。心の病（心臓病ではないか）も不眠症にもかかっている。つらい仕事をやめたほうがいい。そのため、同僚と仲良くしたほうが得策だ。仲良くした

ら、彼らも君のことを許してあげて、楽な仕事を君に回してくれるかもしれない。「仲良し」と「こまをする」のは別のことだ。前者は人生に必要な条件であるし、後者は不正の人の仕業だ。まず、体の健康を取り戻す。そして、時間を使って、役に立つ学問の勉強をし、この狭い生活環境を飛び出せるための準備をする。古今東西、多くの成功者は徒弟から始めるのだ。君も自分の前途に悲観しないでほしい。困難を踏んで戦おう（第二巻第十二期）。

以上の職業に向ける悩みに対し、周囲とコミュニケーションを取ることを勧めている。次に見るのは恋の悩みである。第一章では娼妓「舞女」に身を落としてしまった女性の相談を見たが、今回の相談は「舞女」と付き合うべきかの悩みも含まれている。相談者はまだ若い。編集先生：私は十八歳の青年だ。二年前にあるお嬢さんと知り合いになった。その時、彼女は十四歳だった。二人は仲良く、手紙を交わし、一緒に公園に遊びに行ったりもした。しかし、この時期は長く続かなかった。理由はわからないが、去年の春、私は彼女と出会って声をかけたが、彼女はただ私を見て何も言わずに行ってしまった。私はつらくてたまらない。その後、私は落ちて考えてみた。彼女は愛を知らないわけでもない。もしかしてほかに好きな人が出来たのか。それとも、私の地位が低いからか（私は顔だちはよいが、あの時まだ研修生だった）。いろいろなことを考えて後、彼女に手紙を送った。しかし、返事が来なかった。私は彼女の無情さを恨んでいる。その後、私は人生の冷たさを感じて、刺激を求めようとしても、道徳と良知が私を止めさせる。その後、私は舞女と知り合った。彼女は親切にしてくれるが、知識が浅い。先生に聞きたいのは昔の女と接近する方法があるか。彼女は今も中学校で勉強している。それとも、この舞女と付き合うほうがいいか。

傑君：君は十八歳で、学業に集中すべき時期で、恋愛を考える場合でない。君の女性の友達はまだ十四歳で、これも勉強する時期だ。君が落ち着くのはよいことで、そうしないと、彼女にとってよくない。君は若すぎて、大人しくなく、舞女とも付き合う——私から見れば、君はまったく勉強に集中していない。どうして舞女と付き合ったのか。君は道楽息子みたいな人だ。十四歳の娘は道楽息子に惚れるとは何と恐ろしいことはないではないか。一方で、君の手紙からは君の利発さも見られる。もし、君が正しい道を選ぶなら、希望が拓けるに違いない。いま君は十八歳で、十年を経ても、二十八歳に過ぎない。恋愛も結婚も遅くない。もし、今から努力すれば、成功後に恋愛のことを考えてください。まず自分のことを反省してください。具体的な答えとすれば、二人とも付き合わない、これが答えだ。先生

と本と仲良くしよう（第三卷第一期）。

次の相談は妻の妊娠、出産をめぐるものである。産む主体ではない男性は、その主体者の身体の変化や出産時の痛みなどは想像できない。夫婦関係の中枢を占める問題ながら、声を大きく語ることが控えられる性関係については、なかなか相談できる機会は多くないようであり、投稿者は『女声』にそれを求めたのであろう。

編集先生…私は田舎の中等レベルの家に生まれ、衣食には困っていない。兄弟もなく、父もなくなった。中学校卒業後、母が私の縁談を決めた。そして、民国二十九年（一九四〇年）に結婚した。旧式な婚姻だが、私は満足している。彼女は私の理想に一致する妻で、結婚してから喧嘩など一度もない。しかし、不幸なのは彼女が難産の体質であることだ。最初の二回、赤ちゃんが胎内で死んでしまった。去年は無事に男の子を産んだ。とても可愛い。しかし、この子を産んだ彼女は「もしまだ子供がほしいなら、ほかの嫁をもらってください」と言った。それから、彼女は出産を拒んでいる。この状況で、自分が家にいるのがよくないと思い、友達と一緒に外地に行って商売をはじめた。すると、私はある少女のことを好きになってしまった。彼女も私のことを愛してくれている。私は彼女にプロポーズして、自分のことを全部打ちあげた。再婚したい理由も彼女に話した。問題は、去年彼女も両親の命令に従って婚約を結んでいることだ。先生の意見を聞きたい。（一）法律上、人情の点から私は再婚できるか。（二）、婚約を破る手続きはどうすればよいか。（三）、相手の両親はもちろん不満がある。彼らを説得する方法があるか。

智宏さん…私たちは君の問題を不合理だと思う。一、君と奥さんとの間は愛情関係が続き、彼女も君の理想的な妻だ。君は本当に出産がそんなに大切なのか、再婚までするつもりか。私たちは君が単純に子供のためにほかの女と付き合うとは思えない。二、君は妻を無視して、ほかの女にプロポーズしてはいけない。二者に対しても不誠実で不合理だ。私たちの具体的な意見は以下の通りだ。（二）、君の奥さんが離婚に同意しなければ、法律上も人情上も、離婚すべきではなく、離婚する必要もない。もし、再婚するなら、君が必ず薄情な人間となるだろう。君の奥さんは理想的なタイプで、彼女は必ず君を理解できて慰められる。君が浮気するのは、完全に肉欲のためだ。これはいけないことで、反省してほしい。（二）、君がそんなに簡単に妻を裏切るなら、これから同じことをする可能性も高い。私たちはあの少女の立場に立つと、君との付き合いを反対する。彼女と結婚して後、君は再び浮気する可能性がある。一方、単純に子供を産むため

に彼女と結婚するなら、尚危ないことだ。彼女が無事に子供を生めるかどうかはわからないからだ。三、彼女も他の人と婚約を結んだ。彼女の相手は君より優れているかもしれない。彼女はどのようにして自分の幸福を犠牲して、君のような無情な人間と結婚するか。最後、このことについて、私たちすら反対する。彼女の両親も支持するわけがない。しかし、誤解しないでほしい。私たちは自由恋愛を主張し、強いられた婚姻と無感情の結合に反対する立場をとる。私たちは封建的な觀念から、君の自由を妨害したりはしない。しかし、自由にも度がある。いかなる自由も理性的に考えるべきだ。そうしないと、自由は「勝手」ということになってしまう。君と奥さんは強制婚姻ではない。君が二人の幸福を守るべきだ。一時的な感情に捕られて我侷なことをしてはいけない。「忠言は耳に逆らう」、私たちは君が理知を用いて自分の婚姻を守ってほしい（第三卷第二期）。

次は夫婦仲は良かったのだが、家制度に端を発する悲劇ともいえる深刻な問題の相談である。

編集先生…私の故郷は江陰にある小さな村だ。童養媳制度が盛んである。私の家も小さいころからある娘を家に連れて、嫁さんとして育てている。彼女は私より一年上で、綺麗だ。私たちの性格は合っている。学歴も同じ程度だ。本当に人々に羨まれる一対だ。戦争が起きて、私は家、財産、母を失った。家計のために、父の紹介で上海のある工場で就職することになる。家に残っているのは父、彼女と幼い妹三人だ。私たちは民国三十九年（一九五〇年）に結婚するつもりだ。私が上海に行った後、私たちは手紙のやり取りで連絡していた。最近、二ヶ月ぐらい彼女が手紙を送ってくれなかった。私は心配でたまらなかった。漸く半月前に彼女の手紙が着いた。驚いた内容だった。「私は君のような正直な人に、こんな父親がいるとは思わなかった。脅迫手段で息子の嫁さんを暴行する…私はもう生きていたくない。しかし、このような状態で始末するなら、汚された心と体も綺麗にならない。私は君を待っている。君の前に謝罪する。私は本当に君に済まない、君の目の前で死ななければならない…私は妊娠している。もう二ヶ月になる。一体どうするべきか。早く君に知らせたいが、君の父が私の行動を監視している。この手紙は隣の奥さんに頼んで君に送るものだ…」。私はこの手紙を読んで恨み、苦しみが交錯する。自分の父がこんな下劣な人間とは思わなかった。そして、彼女の手紙が届いた三日後、私は父からの手紙を受け取った。「私は君一人の息子しかもっていない。君の母もなくなり、本当に家が寂しい。手紙を読んだら、すぐ家に戻って結婚しなさい。私も早く孫を見ることができ」と書いた。彼は明らかに子どものことを解決するために私を呼び戻そうとする。先生、こんな状況でどうするべき

か。（二）、私は帰るか帰らないか。（三）、この事を公にするかしないか。（四）、法律により、父を起訴することができるか。もしできるなら、どんな方法で彼を起訴するか。（五）、この事をうやむやのうちに終わらせる（彼女と結婚する）なら、生んだ子供は兄弟として扱うか、それとも子どもとして扱うか。（六）、それとも帰って、彼女と父を結婚させるか。

介然先生…これは悲劇だ。劇の中に三つの登場人物がいる。父、未婚者と君。一番辛いのは君の婚約者だろう。小さいとき、貧乏な生活を送り、両親に売られた。成人になると、愛される恋人と出会ったのに、恋人の父に暴行された。社会には数千万の女は君の婚約者と同じように、運命に苛められている。私は君の問題をよく考えた後、とりあえず以下のように答える。読者側にはもっとよい解決があるなら、ぜひ教えてほしい。（一）、すぐ帰って、彼女を連れて行くべきだ。こんな場合で、君は彼女の気持ちをくんで、そして、君にすべてを説明する機会を彼女にあげるべきだ。（二）、公にはいけない。関係者はすべて君の家族だ。家のできことは外にもらしてはいけない。ほかの人に知られるなら、笑われるに違いない。そして、過ちが噂になり、どんどん飾られて、永遠に解決できない問題になる。（三）、法律によると、君は父を訴える権利がある。父としても、罪を犯すなら、法律の処罰を受けるべきだ。（四）、うやむやのうちに終わらせるのはいい方法だと思う。でも、父に自分の過ちを認識させなければならない。生んだ子供は名義上は君の子供だ。君と妻は次の世代の心に傷が残らないように銘記する。（五）、これも一つの解決方法だ。しかし、君が自分を犠牲にしたいか。君の婚約者も受け入れるか。君の父は夫の責任を負えるか。感情的に出来辛いことだろう（第三巻第四期）。

次に見る男性からの相談は、幼いころに決められた意に染まない結婚相手への不満と苦悩である。手紙に最初にあるように「お坊ちゃん」で、何も考えないで行動を起こしてしまった結果、現在の不幸を招いている。

編集先生…私は田舎の坊ちゃん、暮らし向きは非常に豊かだ。祖父が清代の県長で、数百ムーの畑を持っている。私の幼年時代は非常に幸福だった。そして、その当時に婚約を結んだ。まもなく、祖父が亡くなり、母の姉妹らは半分以上の財産を奪った。私の家はそれから十数回ぐらい強盗に侵入された。父は安全のために、近くの町に引っ越した。そして、店を出して、田舎の畑をほかの人に賃貸して、数年間の平穏な生活を送った。しかし、不幸なことに戦争が起こった。仕方なく、家族は上海へ逃げてきた。父はタバコを売り始め、物価が上がってきて、店の商売も盛んになってきて、生活もよくなってきた。そのとき、私は中学校の試験に合格し、入学した。本当に幸

福な生活だ。私は子供のように毎日楽しんで、勉強にも精進していなかった。ただ三年間の自由な生活を過ごした。いろいろな知識を学んで、友達もいっぱい作った。十七歳のとき、つまり、中学校を卒業するとき、父が私の縁談を思い出した。私は反対しても、その態度をきっぱり表明していなかった。親孝行に屈服したのだ。母は結婚してから学業も続けるという風に私を慰めた。私はこのようにして結婚してしまった。子どものとき、ずっと親に甘やかされて育った私は優柔不断になってしまった。私は結婚成立に対して知識がなく、醜い女は親たちの嫁さんで、私の妻ではないと思っている。今の私は一人の女の夫になり、一人の子どもの父になる。親はようやく孫ができた。彼らは幸福だが、私は傷つけられた。私は青年で、外へ出て事業を行いたいし、優しく美しい妻がほしい。しかし、この願望は親に壊された。私は親を愛しているが、自分の青春をもっと愛している。このように自分を犠牲にするのは悔しいことだ。子どもを見ると、思い出すのは自分の犠牲だけだ。もちろん、私自身が自分の青春を葬るのだ。子供の体は虚弱体質だ。妻と母の関係もよくない。私は妻と母の間という厄介な位置に立ち、両方からの圧力を負っている。私は度々後悔している。当時の弱さに後悔している。それから三年を経て、父が肺の病気でなくなった。家族を養う責任が私の肩に降りかかってきた。仕方がなく、私は学校を辞めて、父の事業を継ぐことになった。私はまだ二十一歳で、子供っぽく、社会経験が不足だ。このような私は社会のさまざまな人間と接するとき、心細くてたまらない。よく母に叱られて、私も知識不足の苦しみを実感している。母と妻もよく喧嘩している。私はどっちが正しいかぜんぜん分からない。あるとき、私はむしろこの二人の關係が徹底的に決裂してほしいとも思う。それで、私も妻と離婚できる。先生、私はそうするべきだ。婚姻に不満を抱いているが、子供はもう生まれた。しかし、自分の青春をそのまま葬るのも悔しいと思う。私はまだ若く、若いうちに勉強しようと思っている。とりあえず、私の生活には新しい飛躍が要る。先生のご指導をもらいたい。

錫華先生…あなたの苦痛は私たちの世代でよく見られる問題だ。私たちの生活は時代の悲劇だ。君に婚姻の苦痛を齎すのはもちろんあなたの親だが、あなた自身も責任があると思う。妻を愛していないのに、どうして子どもをもったのか。婚姻を終わらせるのは難しいことではないが、一旦子どもがいる場合、簡単に解決できる問題ではなくなる。あなたは若くて、理想もあるなら、まず家から出る。子どもについて、もちろん責任を負うべきだ。これからは自分を困らせないように、子どもを生ませないほうがよい。人生は長いものだ。あなたはまだ二十一歳で、一応結婚のことを忘れて、ほかの事に集中しよう。時代は動いている。三年、五年後はどういう風になるのは誰

もわからない。もし、いま家から出られないなら、妻と別居する。あなたが彼女を愛していないということをはっきり彼女に示す。そして、新しい観念を君の妻に教える。貞操に拘らなく、夫婦の感情がうまく行かないなら離婚できる。いつの日か、彼女も今の婚姻の苦しさを感じるだろう。もし、あなたがはつきり自分の態度を彼女に示さないなら、彼女は旧式な女として、決して君を離れようとはしないだろう。もっと強くなろう。あなたは子ども時代の裕福さが逆に今の困難につながっていることを知っているなら、今の困難を鍛える機会として捕まえよう。私たちは困難の経験で成長を求めるべきだ（第三巻第五期）。

前述したように女性のための雑誌『女声』であると創刊号の巻頭言にはあるが、創刊してから男女の場としたいと方針が変更された。だが、やはりタイトルからして女性向け雑誌色は強い。次に見るのは、そうした声である。

編集先生…一、私は「女声」を買うとき、必ず笑われる。このような女の書籍、君が何のために読むのか。君が女を求めるか。こういう風にいわれるとき、私の顔は真っ赤になり、どういう風に答えるべきかが全然わからない。二、私の叔父の耳が病気にかかってしまった。医者に見てもらったが、治らない。もう三年になる。ほとんど聞こえなくなる。先生は何かアドバイスがあるか。

弘健君…「女声」は女の読み物だという人は無知的で、可哀想だ。彼らを見ればいいのだ。君が元通り雑誌を読んで、笑われるときも落ち着いているなら、彼らもだんだん自分の下らなさに気づき、笑わないようになる。君の叔父の耳の件は中耳炎ではないか。とりあえず、耳専科の病院に診察してください。上海赤十字病院には耳専科がある。医者が優れている。この病院に行ってみたらどうか。そして、耳の清潔に注意すべきだ（第三巻第八期）。

次は男性からではないが、芸術家の恋人（男性）を持つ女性からの手紙である。芸術を通して一緒に伸びていこうとする恋人同士の悩みは、これまで恋愛の相談は比較的幼く他愛もない手紙も多く載っていた信箱の中でも異彩を放っている。男性が経済力を担う支柱であるという封建的な思想が続く中で、経済力のない男性と結婚することを躊躇する相談であり、これは男性の負わされている問題と思われるので本章で紹介することにした。

編集先生…私の婚約者は画家だ。今年三十歳で、家庭が貧乏だが非常に勤勉だ。彼は画期的な画家になることを目指している。芸術のために、彼は六年前、自分が開いた工場を閉めた。五、六回の個展を開いたが、成績がよくない。彼は交際が苦手だ。彼の絵を応援して

くれる人がいない。彼は絵画が高尚なものだと強調し、交際を通じて画を売るのが貶めている。彼の収入は自分の生活を維持する程度で、六十代の母も親戚のところに住んでいる。彼の芸術成績は確かによい。彼はこの社会環境を嫌っている。人間関係もうまくいかない。だから、彼は画を売ることを期待していない。毎日十時間以上、練習する。最近、彼の精神状態がちょっとおかしい。落ち込んでいる。彼は私に「母は私に結婚してほしい。親戚が母の世話をしているが、母も六十五歳だ。残り時間も少ない。孫をほしい気持ちも私は理解できる。でも、私はいままで生活が独立できていない。本当に親不孝な人間だ。でも、私は絵を捨てられない。私は芸術上の成功を渴望している」といった。私も絵が好きで人間だ。彼の指導をもらい、画の技法もだいぶ進歩した。私も早く彼と結婚したい。二人一緒に進歩したい。以下の問題を先生に聞きたい。（一）、彼の場合、芸術のために、引き続き努力するのは適切だろうか。（二）、彼は副業、あるいはほかの職業をする必要があるか。でも、彼は社員としては不可能で自営業しかできない。しかし、資本が足りない。（三）、彼は結婚できるか。

宇清さん…あなたの字は非常にきれいだ。見ればあなたは絵が描けることがすぐわかる。でも、こんなによい紙で手紙を書くのは勿体無いと思う。この上品な紙はきれいな絵を描くために使うべきだ。今の社会、どんな国でも、芸術家の運命は同じだ。彼らは非常に困難な生活を送っている。人格が高潔であればあるほど、人間との交際が苦しくなる。芸術に忠実になればなるほど、生活が貧しくなる。いかなるものも商品化されたこの社会には、芸術も商品化され、芸術家も商品になる。自分の作品を宣伝しないと売れない。あなたの未婚者は高潔な画家として、貧乏になるのも免れないことだ。しかし、あなたが彼の経済問題を心配する必要はない。あなたが婚約者としての立場で応援し、彼の芸術の力になればいい。彼が絵に執着するのは正しいことだ。芸術家ならではの精神だ。成績を上げた芸術家―作家、音楽家、彫刻家―皆もこういう精神を持っているのだ。彼を励まし、本当の力があるなら、世間に認められる日が必ず来るだろう。職業の問題については、彼はほかの事をやる精力がないかもしれない。でも、美術学校で、先生になるのは可能な方法だ。いまの状況で、たとえ固定的な給料があっても、生活は維持できない。結婚について、あなたたちが同意すれば、もちろんありがたいことだ。今の非常時は、節約しながら結婚式を行うべきだ（第三卷第九期）。

次は身体に障害を持つ男性からの手紙である。

編集先生…私は中学生だ。母の腹から出た私は、幸運児とも言えるだろう。私の誕生は家族に望まれてたからだ（三十代の親が、それまで子どもができなかった）。しかし、私の左の耳は生まれつき耳殻がない。これは生まれつきの欠陥だ。大きさは普通の耳の半分しかない。小学校入学のとき、検診で右の耳が聞こえないという結果が出て、そして、近眼もすごい。どうして、私はほかの人と同じ、普通の器官を持つことが出来ないのか。家では親に愛されていない、学校で学生に笑われる。聞くに堪えないあだ名が幾つかつけられる。これは一時の苦痛に過ぎない。私自身の問題は以下の二つがある。（一）、完全に聞き取れない。（二）近眼だが、メガネを掛けられない。勉強している青年に対して、このような不自由な体は本当につらいのだ。友達は「上海にはある美容病院がある。そこで、耳の形が直せる」ということを教えてくれた。先生に以下の問題を聞きたい。（一）上海には本当に美容病院があるか。もしあるなら、アドレスを教えてください。（二）大学進学、或いは仕官学校へ入学ができるか。

元章君…私たちは君の境遇に同情を寄せる。私は君の写真を見た。悲しみと情熱が溢れた顔だ。私は君の「不幸」を嘆く。耳の欠陥と近眼は確かに不幸だ。もし、そのままで堕落して、向上的な魂を持っていないならば、それが本当の不幸となる。世の中の多くの科学者と芸術家の体と顔面は不完全なものだ。しかし、強い意志を持って頭脳明晰、成功者となる。逆に、体が丈夫な人ほただだ寄生虫のように社会で生きている。この二種類の人間を比べると、前者のほうがよいのだ。ほかの人に褒められても、笑われても、本当の榮譽と恥辱ではない。概観を批評するのは衣装を批評すると同じことではないのか。人間と動物の区別は、足で直立に歩くことではない。人間が思想と感情を持つところだ。耳の不健全は君にとって、もちろん障害物だ。でも解決方法がないことではない。君は授業が終わって後、理解できないところを先生に聞いて、課外時間で自習する。ほかの人が遊んでいるとき、勉強しよう。メガネを掛けるために、美容病院に手術を受けるまでいく必要がない。上海はこのような病院があるが、費用が非常に高い。そして、本当に君を助けられるかどうかは確認できない。君がメガネの専門店で、店員と話合って、細い縄あるいは皮製の帯を使って、右から左の耳まで回して、メガネを固定する。美観かどうかについては気にしないように。他人の目つきも気にしないで、目がはっきり見えることが一番大切だ。仕官学校について、近眼は条件に相応しくない。一般の大学は進学できる。人間の生活は困難との闘いだ。君は小さな困難に落ち込んでつらくなる必要がない。君の前途は明るくて期待できることだ（第三巻第十期）。

次は回答に注目してもらいたい信箱記事である。

編集先生…私は二年間しか勉強していない。しかし、私は厳しい生活環境で、真面目に勉強している。民国三十二年（一九四四年）から、私は義務夜間補修学校に通い始めた。一年間勉強したが、学校の状況がよくないので転校した。この学校は前の学校より何倍もましである。父は享楽派、稼ぎがなく、家を維持するのは母と妹だ。私はこのような生活を我慢できない。私の目的はある日、公衆のために身を捧げることだ。私は農村の教師をやりながら、自習しようと思う。先生、私は自習していて、夜間学校をまだ卒業していない。私は字が読めない子どもを教える資格があるか。先生のご指導を聞きたい。

仁潔君…君が人々のために奉仕しようとする。これはありがたいことだ。皆も民衆のために力を捧げるという思想を持つべきだ。田舎で教師を務めるのは素晴らしい考えだ。わが国の農村教育はずっと遅れている。農村の民衆は皆さんの指導を待っている。君はまだ中学校から卒業していない。先生としては確かに少し早い。しかし、昔には「教える側と学ぶ側がともに成長すること」という言い方がある。知識を教えながら、自分も勉強する。学ぶ側は知識を得られるし、君も進歩できる。やってみてほしい。先生としては、真面目な態度を取らなければならない。自分も努力しなければならない。自分がわからないところに気づいたら、すぐ誰かに聞いてほしい。自分が向上心を持つなら、きつと大きな業績を上げられる。君が素晴らしい青年教師になれるのを祈っている（第三卷第十一期）。

以上のように、この相談は公のために尽くすことを勧めている。女性の相談の回答には、ほとんど見られないことである。「皆も民衆のために力を捧げるという思想を持つべきだ」という言葉は、これまでの信箱では見慣れない言葉である。田村俊子Ⅱ左俊芝が書いた言葉とは私には思えない。ただし、田村俊子はバンクーバーから帰国した当時（一九三六年）、日本の農村女性の生活実態を調査していた丸岡秀子との交際を深めていた^{注3}。中国に渡ってから農村における労働問題は関心が深かったことは想像できる。

いよいよ最後となった。創刊号から三十六号を網羅的に見て来たが、創刊間もないころの信箱は他愛のない恋愛の相談も数多くあった。初期のころとは異なり重苦しい暗雲が立ち込めている感のある手紙である。そしてこの期が田村（佐藤）俊子Ⅱ左俊芝編集長最後の『女声』となる。

編集先生…私は今年二十歳だ。去年の六月で学校を辞めて上海に行くことにした。私が学界から商業界への転換の始まりとなる。戦時

下において、商業界も非常に不景気だ。私が勤めている店も暇だ。私は一日中あれこれ考えているばかりで、時々、非常につらくなる。急に笑い出すこともある。同僚らは私が精神的に何か問題があるかと疑い始める。私はもちろん正常である。ただ感情が自然に沸いてくるだけだ。私は昔の歳月を思い出して、涙が零れてしまう。未来のことを考えるとき、何も見えなくて混沌としている。私は商業界から離れて、自分の出口を探そうとする。「時代が英雄を作る」これは正しい言葉だ。この陰悪な社会で、他人を助けてあげる人はほとんどいないだろう。これは解決したい問題だ。私はただ「この道を通じない」という道を選ぶしかない。先生、あなたは私を導く光だ。ぜひご指導ください。

暮野君…確かに、今のような不安な戦争時代で、志を持っている青年は未来が見える道を探すべきだ。民衆の利益のために、自分の力を捧げるべきだ。君が商業界から離れて、ほかの道を探そうとするのは正しいことだ。「時代が英雄を作る」、これは昔から伝えてくる諺だ。しかし、この諺に関する解釈は多い。「時代が英雄を作る」、これは人々が既に成功した人を評価する言葉だ。英雄はよく乱世で生まれ、乱世には英雄がよく出てくるという意味だ。乱世で、自分を犠牲し、他人の利益を考える人は英雄だ。しかし、自分でこの言葉を用いて「今は乱世だ。私は英雄になる機会がある」という風に解釈するなら、大間違いである。この考え方は封建的な英雄主義である。これは自分が名譽、英雄と呼ばれるということを求めるものだ。民衆のための事業ではない。英雄が英雄になれるのは、決して自分が英雄を目指したわけではない。多くのことを犠牲にした後に英雄になる。手紙によると、君は情熱的な少年だということがわかる。皆の力になるための道がたくさんある。自分が正しいと思うことをやれば十分だ。そして、事業を作るには、事業そのものに力を入れるほかに、読書と勉強も必要なことだ。君の能力が高く、経験が豊かになると、負わされる責任も多くなれる。英雄事業は武力だけではない。筆を持つ、本を持つ、鋤を持つと刀を持つと同じだ。機会が来る前に、できるだけ本を読んで準備をしたほうが得だ。そして、商人は完全に否定すべき職ではない。やり方次第に性質も変わる（第三卷十二期）。

おわりに

（六八）

本論では、田村（佐藤）俊子の晩年を賭けて発刊し続けた『女声』は、その個性が最もよくわかるものとして「信箱」に注目して見て来た。はじめにでも記したが、本論は信箱全記事から特徴を感じさせる記事を要約し、なるべく時系列に従うように選択した。結果、全体の四分の一度になった。このような方法によって、いったい何が明るみに出されるのか、まだその結論は出せない。しかしながら、このように網羅的に「信箱」を見ていくことによって、ある傾向はつかめるのではないだろうか。創刊間もないころは日中戦争下とは思えないほど、当たり前の日常生活の中で生まれる相談事が多かった。本論の対象とした期数のちょうど半分あたりから男性読者からの投稿が多くなり、その内容も回答も女性のものとは相を異にしていたことが見受けられた。

『女声』が刊行された当時の上海という国際都市は、行き場の無くなった人を受け入れ、あらゆる人々の生を包み込んで生き延びさせた希望だとするならば、俊子にとっての『女声』も希望であり、男性の生も包み込んで行く媒体（メディア）であったと言えるのではないか。人が人と巡り会って、惹かれあい一緒に暮し、そこで生じる自我と自我のぶつかり合い、そしてそこに男女の性関係が絡み合い、あらゆる感情と身体感覚がその人間を包み込む。そうした世界を小説に込めた作家が、日中戦争下の国家間による自我の格闘ともいえる相剋を、俊子にとって母語ではない中国語の雑誌『女声』でどのように表現したのか、その生の声が「信箱」や「余声」では見えてくるものと思われる。

注1 童養媳とは、将来の嫁にするために、幼女を引き取り（安く買い）、家庭での労働にも従事させる制度のこと、またはその幼女をさす。（参考文献・関西中国

女性史研究会編『中国女性史入門』人文書院、二〇〇五年三月）

注2

嚮導女は遊興場や娯楽場に男性客を引き寄せて店の収入を増加させるサービスを行う女性のこと、舞女はダンスホール経営者に客を引き付けるために雇われ、客と踊る女性のことである。いずれもエロティックでロマンティックなふりまいで男性客にサービスをする女性のことをさす。（参考文献・許慧琦、須藤瑞代訳「妓女・女招待・舞女―訓政時期（一九二八―一九三七）北平市における市民消費の新様相―」、野澤豊・中国女性史研究会編『近きに在りて』第四八号、二〇〇六年一月、所収）

注3

丸岡秀子『田村俊子とわたし』（ドメス出版、一九七七年七月）

※本論は平成二四年度札幌大学研究助成金による研究成果である。